第Ⅱ章　調査概要

1　調査地域

A　位置と環境

i　遺跡の位置

藤原京左京六条三坊は、現在の行政区分では奈良県橿原市木之本町・高殿町にあたる。調査地は藤原宮の東面南門から南東に約250mの、香具山西北麓の地である。香具山は大和三山の一つで、古来特別な存在とされてきた。『万葉集』には、舒明天皇や中大兄皇子、あるいは持統天皇の歌をはじめ、香具山を詠んだ歌が15首残されている。

香具山は「天」という尊称が付くように、三山のうち最も神聖視されていた。『伊予国風土記』逸文には、天から山が2つに分かれて落ち、1つが伊予国「天山（あめやま）」となり、1つが大和国「天加具山」になったと記されている。

その信仰を表すように、周辺には多くの神社が所在する。北麓にある天香山神社は、正式名称を天香山坐櫛真智命神社という。卜占を司る神、櫛真智命神[1]が祭神である。十市郡の式内社で、天平2年（730）の大倭国正税帳に神田一町歩をもち、『新抄格勅符抄』によれば、大同元年（806）の太政官牒では、大和国に新封一戸を寄せられたという。本殿の背後には、屏風のような巨石が3個ある。古代の祭祀形態の磐座で、当社の神の依代であったとも言われる。

山頂にあるのが、国常立命（国之常立神）を祭神とする国常立神社である。国常立命は天地開闢の際に出現した神で、『日本書紀』では最初に現れた神とされている。2宇の小さな祠があり、そのうちの1宇には、祈雨、止雨、灌漑の神として信仰される高龗神を祀る。ここを、本来の「天香山坐櫛真智命神社」とする説もある。なお、香具山東麓の伊弉諾神社と伊弉冊神社は、この神社の末社である。

南麓には天岩戸神社があり、式内社の坂門神社ともされる。天照大神の岩戸隠れの伝承地とされる、岩穴や巨石を神体とする。そのために神殿はなく、巨石の前に拝殿のみを配すという、古代の原始的な祭祀形態を残す。

香具山西北麓、調査地のすぐ北には、啼沢女命（泣沢女神）を祭神とする式内社、畝尾都多本神社が所在する。『古事記』上巻には、伊邪那美命が火の神軻遇突智を産んだことにより身罷られたことを、伊邪那岐命が悲しまれた時のこととして「坐香山之畝尾木本、名泣澤女神」と記載がある。ちなみに畝尾とは山の裾のことで、木之本町の地名はこの故事による。また、持統天皇10年（696）に檜隈女王が亡き高市皇子を偲んで詠んだ挽歌、「哭沢の杜に　神酒すゑ祈れども　我が王は　高日知らしぬ」の哭沢の杜は、この地とされる。

畝尾都多本神社のすぐ東には、畝尾坐健土安神社が所在する。この社も式内社で、香具山の

埴土にまつわる健土安比売命（波邇夜須毘売神）を祭神とし、香具山との間には赤埴山という小丘がある。

『日本書紀』神武即位前紀や崇神紀によれば、香具山の埴は神聖視され、倭国の物実（ものしろ）、即ち大和国支配のシンボルとみなす観念があった。天香山の埴土を取って祭器を造り、諸神を祭ったという。土を取った所を名付けて埴安と言った、という地名説話がある。香具山西北麓、畝尾坐健土安神社との間の赤埴山には、埴安伝承地の石碑が建つ。1915年刊行の『奈良県磯城郡誌』は天香山村の赤埴山の項で、「香具山の西北に接続し、全山赤色粘土なれば赤焼土器に適するならん。土人これを赤せん山と称し、香具山の中央西側は白色粘土なるを以て、土人これを白こと称せり」と記している。天香山神社境内に「赤埴聖地」、国見台付近には「白埴聖地」の石標が建っている。また、赤埴山には「埴安伝承地」の碑がある。

香具山の周辺には、多くの池があったという記録がある。西麓にあったとされる埴安池は『万葉集』所収の柿本人麻呂が高市皇子の死に際して作った挽歌や、藤原宮御井歌に「埴安の堤」としてみえる。香具山の東麓の磐余池とともに、現在では失われてしまった。磐余池に関しては、近年の橿原市教育委員会の継続的な調査により池の堤などを確認し、徐々にその姿が明らかになりつつある。

調査地の東には、香具山の西麓に沿って中ノ川が北流する。中ノ川は上流にさかのぼると、大官大寺を経て奥山廃寺の西を通り、飛鳥坐神社の北に至る。飛鳥坐神社のすぐ南方の飛鳥東垣内遺跡[2]では、幅10mにおよび、石積み護岸をもつ7世紀中頃の大溝を検出しており、『日本書紀』に記載がある、斉明天皇が築かせた「廼水工をして渠穿らしむ。香山の西より、石上山に至る。（中略）宮の東の山に石を累ねて垣とす。時の人の謗りて曰く、狂心の渠」の跡と推定されている。同様の素掘溝は「宮の東の山の石垣」であることが確実な酒船石遺跡のすぐ北の飛鳥池東方遺跡[3]でも確認しており、北に目を転ずれば奥山廃寺西方の中ノ川東岸でも検出している[4]。こうした状況から、かつて田村吉永が推定した[5]ように、中ノ川はその多くが狂心渠を踏襲しているものであると考えられ、今回の調査で大規模な溝が直線的に北流していることが判明したことからも、香具山西麓を経て北に向かうとみてよいであろう。

ii　周辺の遺跡

縄文～古墳時代　調査地付近において人間の活動を示す最も古いものとしては、縄文時代前期の土器が藤原宮東方官衙地区[6]や高所寺池[7]等で出土している。中期～晩期にかけての土器もみられるが、いずれも断片的なもので、大規模な集落の存在をうかがわせるものではない。香具山南方の大官大寺下層からは、中期末～後期前葉と後期末～晩期前葉の土器が多数出土した[8]。あわせて土坑も検出しており、継続的な居住地であったと考えられる。

弥生時代に入ると、西方の飛鳥川右岸に四分遺跡が出現し、中期から後期にかけては拠点的な集落として繁栄した[9]。また、藤原宮東北隅の榊田遺跡では円形周溝墓を検出している[10]。

古墳時代には多数の遺構を確認しており、活発な土地開発と利用が知られる。藤原宮下層では、豪族居館と目される建物群を検出している[11]。また、高所寺池の調査では韓式系土器や陶質土器が出土[12]し、渡来人との関係で注目される。古墳は墳丘を残すものは少ないが、日高山の横穴墓群をはじめ、朱雀大路や藤原宮の造営で破壊された古墳を多数検出している。また、調査

地のすぐ東方には、形象埴輪を出土した香具山北麓遺跡が所在する。

７世紀前半～天武朝　調査地周辺はいわゆる狭義の飛鳥地域からは外れるが、現在の山田道より北、香具山の周辺にも多くの７世紀の遺跡があり、また高市皇子の「香具山宮」からも、当地は飛鳥中枢部での様相と関連させて考えるべきであろう。調査地西方では飛鳥Ⅲの土器を出土する井戸を検出[13]し、７世紀中頃の時期にある程度の土地利用があったことを推測させるが、小規模な調査であったこともあり、具体的な様相は不明である。

香具山の南方、橿原市南浦町から明日香村小山・奥山にかけて展開する小規模な盆地には、多くの遺跡が埋もれている。大官大寺北方遺跡では７世紀中頃の大規模な整地と石組暗渠を検出した[14]。整地の範囲は東西400ｍ、南北300ｍ以上の範囲におよぶことが判明しており、宮殿あるいはそれに類する遺跡の存在が推定されている。盆地東端の上の井手遺跡でも、延長73ｍ以上におよぶ大規模な石組暗渠と、それに伴う厚さ１ｍほどの整地を検出した[15]。石組暗渠は後述する小山廃寺の下層でも検出しており、これらは飛鳥地域の開発の進行を示すものとして注目されている。

香具山の東南麓に位置する興善寺跡の調査では、７世紀後半に位置づけられる７間×４間の大型四面廂付掘立柱建物を検出[16]し、香具山宮との関連が考えられた。また、明日香村奥山の奥山・リウゲ遺跡では、天武朝と考えられる大規模な掘立柱建物を検出[17]し、貴族邸か皇子宮である可能性が指摘されている。

この地域の西端近く、飛鳥川の右岸では、藤原京の完成に先立つ時期に大規模な施設を造営しており、それは藤原京の時期にも存続している。雷丘北方遺跡[18]では、正殿と脇殿等を備えた大規模な建物群や区画塀を検出し、官衙か貴族の邸宅と推定される。これは京の計画がある程度進行した時期に造られたとみられ、藤原京期にも左京十一条三坊の西北坪・西南坪の二町占地の施設として存続する。雷丘東方遺跡（左京十一・十二条三坊）では７世紀後半の長大な南北棟建物を２棟検出[19]し、天武朝から藤原京期にかけて存続したとされている。また、石神遺跡でも天武朝から藤原京期にかけての一連の遺構を検出している。

藤原京期　調査地周辺では、藤原京の調査で注目される成果が得られている。左京一・二条四坊の調査では東四坊大路東側溝から「穂積親王宮」と記した木簡が出土し[20]、天武天皇の第五皇子、穂積親王の邸宅がその近辺にあることが推測された。調査地北方の左京四条三坊東南坪・西南坪では、少なくとも二町以上にわたる宅地を確認した。また藤原宮南面の左京七条一坊では四町占地の可能性が高い施設を確認し、多量に出土した木簡から当初は中務省関係の施設の可能性が考えられ、現在では衛門府であるという見解が出されている[21]。朱雀大路をはさんだ右京七条一坊では、西南坪で一町占地の宅地を確認した。一方、藤原宮に接する西北坪では一転して遺構密度が低く、坪内を分割して利用している状況もうかがわれ、六条大路との間を画する掘立柱塀も検出していない。この様に藤原京の調査では興味深い成果が上がっているが、それについては第Ⅵ章５で改めて論じることとしたい。

寺　院　調査地の周辺では７世紀代の瓦が出土することが古くから知られており、木之本廃寺と称されていた。この木之本廃寺は、舒明天皇発願の百済大寺に比定されることがあったが、吉備池廃寺の調査で彼の地が百済大寺である可能性が強くなると、百済大寺を移建した高市大寺である可能性が考えられた[22]。しかし、明確な寺院関連の遺構はまだ見つかっていない。

調査地の西南約700mには、外縁に雷文をもつ軒丸瓦が特徴的な小山廃寺（紀寺跡）が所在する。寺域は藤原京の条坊では左京八条二坊の四町を占め、近年の研究により、寺の中軸線と条坊が整合性をもつことが明らかとなり、その創建は京の造営開始以後となることが知られる。この寺については、紀氏の氏寺とする説や天武朝の大官大寺（高市大寺）とする説があるが、決着はみていない。

香具山の南麓には現在も日向寺があり、その周辺が日向寺跡である。創建年代は不明だが、聖徳太子の建立とする記録があり、蘇我氏同族の箭口氏の氏寺とする説もある。明治初年まで心礎と考えられる巨大な石が残っていた記録があるが、発掘調査は進んでおらず、詳細は不明である。また、調査地の北東約800mには膳夫寺跡がある。礎石が一部残り、瓦も出土するものの、伽藍配置などは未確定である。

奈良時代　平城京遷都後には左大臣正二位石上朝臣麻呂が留守官となり、藤原旧京内に残された施設の管理にあたった。藤原宮では、大極殿をはじめ大垣にいたるまで、主要な殿舎や施設の部材、瓦、礎石等は平城宮に持ち去ったと考えられる。その結果、宮域は広大な空閑地となったのであろう。一方、宮外周の外濠はその後も基幹排水路として機能しており、10～13世紀に最終的に埋没するようである。藤原宮西北隅の調査では、奈良時代の井戸を検出し、外濠からは多量の奈良時代前半の土器が出土した。[23]

藤原宮や京は、平城京遷都後ほどなくして耕地化されたと考えられる。全域に条里が施工され、遺存地割りからは条坊はおろか、藤原宮の痕跡も読み取ることができない。わずかに大極殿の土壇が残るのみである。発掘調査では、耕地に伴う耕作溝が縦横に走る状況を常に見るところである。藤原宮大極殿院南門の調査では、一部の耕作溝よりも新しい奈良時代の掘立柱建物を検出するとともに、一帯を整地している状況を確認した。[24] 建物群は、南門基壇上に桁行6間の東西棟建物を建て、その北方に柱筋を揃えて同規模の東西棟がある。その間の東西には桁行3間、梁行2間の南北棟建物を配するという、計画性の高い配置をとる。柱穴や整地土からは平城宮土器Ⅲに比定される土器が出土し、奈良時代中頃に新たな造作があったことが知られる。また、大極殿院の調査でも同時期の可能性が高い掘立柱建物や、土器埋納坑を検出した。[25] これは蓋をかぶせた須恵器杯Ｂを埋納したもので、内部には和同開珎5枚を納めていた。その他、宮内各所での調査で同様の時期の遺構や遺物を確認しており、奈良時代中頃の土地利用がかなり広範囲にわたる可能性があることが注意される。

平安時代以降　先に述べた藤原宮西北隅の調査では平安時代の井戸も検出しており、木簡が出土した。これは弘仁元年（810）10月から翌2月にかけての荘園の出納簿で、周辺がこの時期には荘園化していたことを示すものである。また、朝堂院地区の一連の調査では、朝堂や回廊の基壇がしばらくは高まりとして残っていた状況がみてとれ、9～10世紀にはそれを利用して建物を建てていた。その周囲には、11～13世紀頃の掘立柱建物も散見され、継続した土地利用がうかがわれる。これは藤原宮内に限ったことではなく、周辺も同様の状況であった。

中世においては、高殿町や別所町をはじめ、調査地周辺で方形に巡る深い溝に囲まれた「方形区画」を検出している。これらは13～14世紀および14世紀後半～15世紀の時期に区分でき、後者の段階は方形区画が現在の集落へと再編される時期であるとされる。[26] なお、調査地の西南に隣接する地は木之本環濠とされているが、実態はわかっていない。

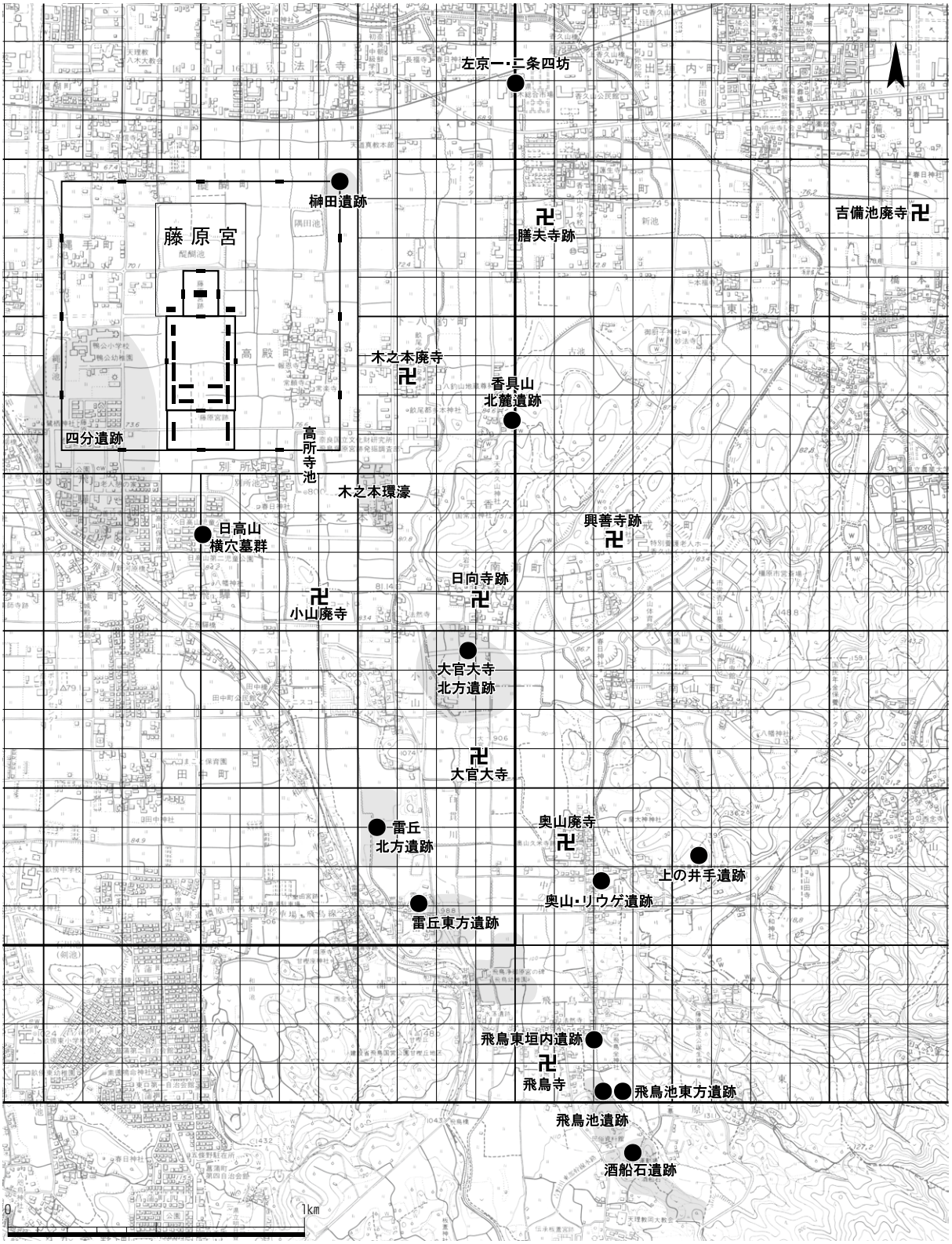

Fig. 3　周辺の遺跡　1:20000

iii　左京六条三坊における調査

本調査区の位置する左京六条三坊では、今回報告する以外にも小規模な調査を数回行っている。それによって坊内の様相をより明らかにすることができるため、ここではそれらを概観することとする。

第21-2次調査　本調査区の西を南北に通る市道165号～小山線の拡幅に伴い、道路西側の西北坪・西南坪東辺を、延長約590mにわたり調査した。調査区の幅は狭小であり、遺構は主として断面観察により検出した。そのうち六条三坊に関わる箇所では、条坊道路では五条大路北側溝、六条条間路南側溝、六条大路両側溝を検出したとみられる。その他、六条条間路の北で幅約4mの東西大溝を検出しており、これは本調査区の成果により、東西大溝SD4130と中世の環濠であることが判明する。1977年2月～1978年1月（奈文研1978『藤原概報8』）。

第23-2次調査　個人住宅の新築に伴い、西北坪と西南坪にかけて逆L字形の調査区を設定し、約200㎡を調査した。予想された位置には六条条間路を確認できず、その場所には南北塀を検出し、条坊のあり方に関して問題を投げかけた。その他、藤原京期の小規模な南北建物1棟と、飛鳥Ⅲの土器を出土する井戸を検出した。1978年7月10～24日（奈文研1979『藤原概報9』）。

第37-7次調査　畝尾都多本神社の西方、西北坪に東西14m、南北3mの調査区を設定して調査した。藤原京期の遺構は確認できなかったが、型押し忍冬唐草文軒平瓦が出土し、藤原京造営以前の寺院の存在が指摘された。1983年9月13～17日（奈文研1984『藤原概報14』）。

第45-3次調査　個人住宅建設に伴い、西北坪の東北部で五条大路推定地を調査した。調査区が東西2m、南北6mと狭小であったこともあり、五条大路に関わる遺構は検出できなかった。1985年7月23～26日（奈文研1986『藤原概報16』）。

第54-1次調査　作業場新設に伴い、西北坪で本調査区と市道をはさんで西側の場所を、東西3m、南北12.8mの調査区を設定して調査した。本調査区で検出した東西大溝SD4130の続きを検出したが、南岸が推定位置より約10m北へずれており、溝が未調査区との間20mの部分で曲折することが判明した。SD4130からは、奈良時代の堆積層から「尾張国海部郡魚鮨三斗六升」と記した木簡（Fig. 4）が出土[27]したほか、多量の土器や軒瓦が出土している。このうち軒瓦は型押し忍冬唐草文軒平瓦1B型式を既に報告[28]しており、そのほかに山田寺式重圏文縁単弁八弁蓮華文軒丸瓦2型式1点と軒平瓦1B型式が2点ある。1987年4月8～10日（奈文研1988『藤原概報18』）。

Fig. 4
第54-1次調査出土木簡

第60-4次調査　市道建設に伴い、本調査区の東北方、東北坪の東辺を調査した。東三坊大路西側溝推定地に、東西2m、南北18mの北で東にやや偏する調査区を設定したが、地山が北に向けて下がっていき、沼状の落ち込みとなる状況であり、側溝を確認することはできなかった。1989年5月10日（奈文研1990『藤原概報20』）。

第66-10次調査　個人住宅建設に伴い、本調査区の西北方、西北坪の東北部を調査した。調査区の大きさは東西7.5m、南北10m。藤原京期かとみられる土坑や小穴を検出したのみで、顕著な遺構は確認できなかった。1991年11月11～14日（奈文研1992『藤原概報22』）。

第69-3次調査　個人住宅建設に伴い、本調査区の西、西南坪の北辺で、後述する藤原京期の正殿SB5000の西約20mの箇所を調査した。調査区の大きさは東西3m、南北4m。藤原京期の顕著な遺構は検出できなかった。1992年5月19・20日（奈文研1993『藤原概報23』）。

第69-14次調査　個人住宅建設に伴い、第69-3次調査区の西約20m、西南坪の北辺を調査した。調査区の大きさは東西7m、南北5m。藤原京期の顕著な遺構は検出できなかったが、出土した瓦が本調査区出土のものと胎土、焼成、製作技法が一致することが注意される。1993年2月25日～3月2日（奈文研1994『藤原概報24』）。

第81-11次調査　個人住宅建設に伴い、東北坪の北東部を調査した。調査区の大きさは東西3m、南北9m。東北方に向けてゆるやかに下がる沼状の落ち込みを検出した。1996年10月14～17日（奈文研1997『奈文研年報1997-Ⅱ』）。

第81-15次調査　個人住宅建設に伴い、西北坪の西南部を調査した。調査区の大きさは東西5m、南北3m。藤原京期の小柱穴2基を検出したが、建物としては把握できていない。1997年1月31日～2月3日（奈文研1997『奈文研年報1997-Ⅱ』）。

この様に、左京六条三坊では他にも小規模な調査を重ねてきているが、坊内全体の遺構配置を復元できるような知見は得られていない。そのなかで、西北坪と西南坪間で推定位置に六条条間路が検出できなかったこと、かつその位置に塀が存在することが明らかになっていることは、坊全体の占地の問題を検討する資料ともなり、貴重な成果であると言えよう。

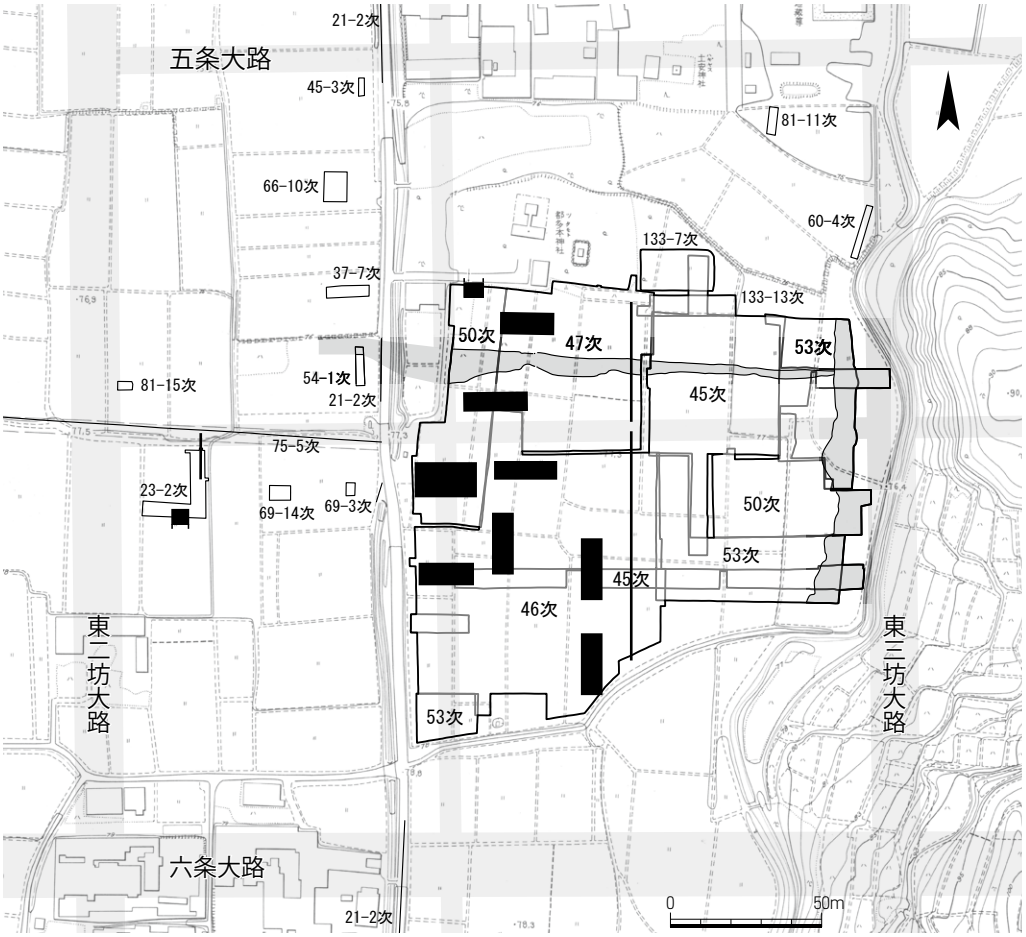

Fig. 5　左京六条三坊調査位置図　1:2500

B　地区割りと測量

測地系　奈文研では、2002年４月１日の改正測量法の施行を受け、2003年度から当研究所の発掘調査は日本測地系から世界測地系に移行した。本書で報告する調査のうち、第45・46・47・50・53次調査（以下、第45次～第53次調査とする。）は日本測地系、第133-7・13次調査は世界測地系に基づく。日本測地系から世界測地系への改算は、飛鳥藤原地域の座標変位量である、Ｘ座標＋346.5ｍ、Ｙ座標－261.6ｍを日本測地系の値にそれぞれ加えることで可能である[29]。本書では本文中挿図（Fig.）は一部を除いて日本測地系で表示し、巻末の図版（Pl.）のみ（　）内に世界測地系の数値を示した。

基準点測量　調査で使用した基準点は、第45次～第53次調査までと、第133-7・13次調査とで異なっている（Tab. 1）。

第45次～第53次調査までは、第45次調査に先立って調査区西の道路に新設した、基準点No. 3およびNo. 4から、開放トラバースによって各調査区際に基準点を移して使用した。No. 3・No. 4は、1977年設置の基準点No. 7（別所池西北隅）・No. 8（高所寺池西北隅）を与点とする閉合トラバースにより設置した点であるが、第53次調査終了後の1987年６月に、No. 7・No. 8の再測を行った結果、1977年設置時の値と大きな誤差が生じていることが判明した。そこでNo. 7・No. 8の再測値をもとにNo. 3・No. 4を改算した結果、ともにＸ座標＋0.41ｍ、Ｙ座標－0.01ｍの移動量が認められた（改算後の値はNo. 141・No. 142）。その移動量にしたがい実測図を平行移動させた結果、第133-7・13次調査の成果にも整合した。よって本書掲載の第45次～第53次調査に関わる図面は、以上の手続きで補正を行ったものである。

第133-7・13次調査では、1997年に調査区西の道路に設けた三級基準点No. 162およびNo. 163の座標値を、世界測地系へと改算したうえで使用した。第133-7次調査では、これら２点を与点に、開放トラバースにて調査区際に基準点を移して使用し、第133-13次調査ではGPS・RTK法を用いて測量を行った。

標高は、第45次～第53次調査では、藤原宮跡に1977年に設置された基準点・水準点No. 30からの直接水準測量によるが、本報告では1997年に行ったNo. 30の再測結果に基づき、実測時の標高値に－0.15ｍ加え修正を行った。修正後の値は、1997年に設置した三級基準点・水準点No. 162からの直接水準測量による、第133-7・13次調査の成果と整合する。

地区割り　次に、調査時の地区割りについて説明する。奈文研では、1993年度末までは、条里制の遺存畦畔を基準とする地区割り（以下、旧地区割りと呼ぶ。）によって調査を行ってきた。第45次～第53次調査は旧地区割りによる。旧地区割りでは、約125ｍ四方の条里畦畔の区画（1坪）を基本単位とし、南北３坪、東西６坪からなる計18坪分（南北約375ｍ、東西約630ｍ）を大地区として設定する。大地区名は、時代を示す数字１文字、遺跡の種別をあらわすアルファベット１文字、遺跡名/位置をあらわすアルファベット２文字の計４文字で表記する。この大地区を東西方向に３分割、南北方向に６～８分割した区画が中地区である。中地区には東北隅から順にアルファベットを付す。そして中地区をさらに３ｍ間隔で分割した区画を小地区とする。小地区名は中地区のうち東南隅となる区画を起点のA01とし、北へアルファベットを、西へ数字を順に付す。以上を原則としつつ、実際には、調査ごとに調査区の位置や形状に合わせて中地区を拡

大して適用するなど、柔軟な運用を行ってきた。そのため、特に調査区境界では、隣接する地区名が必ずしも一致せず注意を要する。

1994年度からは、上記の旧地区割りを廃止し、平面直角座標系（日本測地系）第Ⅵ系（原点：北緯36°東経136°）に基づく新地区割りに移行した[30]。地区の規模や配列は概ね旧来のものを踏襲しつつ、新地区割りでは、平面直角座標系によって地区境界を定め、規格的なものとした。大地区は東西672m南北324m、中地区は大地区を18に分割した区画で東西222mまたは228m、南北54mである。小地区は旧来の規模と同じく3m四方とする一方、東南隅の小地区名称をA10に改めた。2002年の世界測地系への移行の際には、両座標系に基づく方眼にずれが生じ、日本測地系に基づく小地区の東南隅の点から南へ1.5m、東へ0.6m移動した別の点に、世界測地系に基づく同名の小地区東南隅が設定されることとなった。第133-7・13次調査は、世界測地系移行後の新地区割りによる調査である。以上、本報告で対象とする調査区と旧・新地区割りの関係を、Fig. 6に示す。大地区は、Tab. 1に併せて記載した。

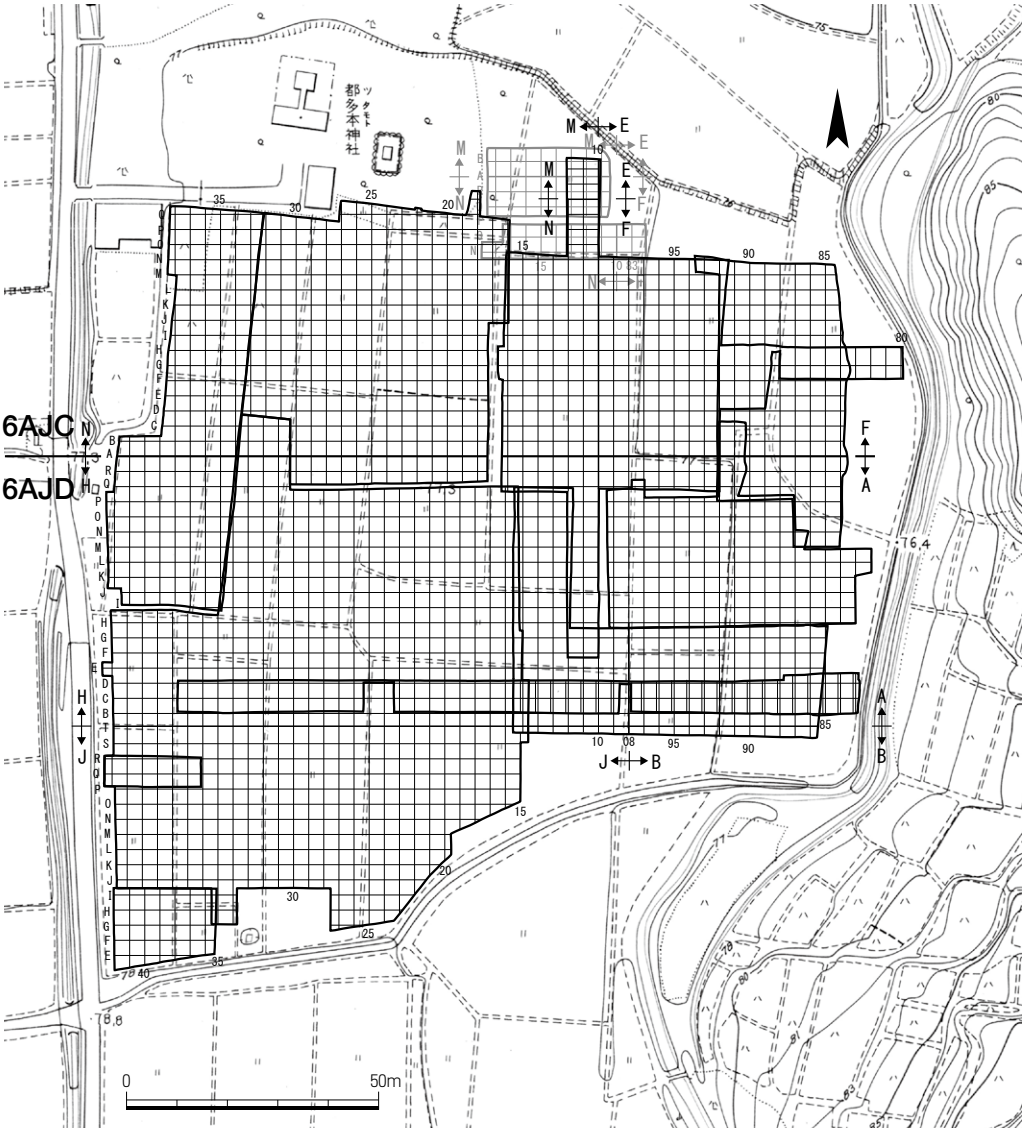

Fig. 6　調査地と地区割り　1:1500（網掛け線部分は新地区割りによる。）

Tab. 1　各調査の地区と基準点

調査次数	調査年月	大・中地区	測地系	基準点		
45次	1985. 4- 9	6AJC-F・M・N　6AJD-A・H・J	日本測地系			
46次	1985. 8-1986. 1	6AJD-H・J		No. 3	X-167,052.74	Y-16,766.92
47次	1985. 11-1986. 6	6AJC-N　6AJD-H		No. 4	X-166,950.24	Y-16,768.70
50次	1986. 7-12	6AJC-N　6AJD-A・H		No. 141	X-167,052.33	Y-16,766.93
53次	1987. 2- 5	6AJC-F　6AJD-A・B・H・J		No. 142	X-166,949.83	Y-16,768.71
133-7次	2004. 9-10	5AJC-M・N	世界測地系	No. 162	X-166,600.999	Y-17,029.801
133-13次	2005. 3- 4	5AJC-F・N		No. 163	X-166,377.713	Y-17,042.813

1） 神名は日本書紀により、古事記の神名は（　）内に記した。

2） 明日香村教育委員会2000「1998-24次 飛鳥東垣内遺跡の調査」『明日香村遺跡調査概報―平成10年度―』。

3） 奈文研1998「飛鳥池東方遺跡の調査 第86次」『奈文研年報1998-Ⅱ』。

4） 奈文研1977「奥山久米寺西方の調査（狂心渠推定地）」『藤原概報7』。明日香村教育委員会1991「奥山久米寺近接地の調査」『明日香村遺跡調査概報―平成２年度―』。

5） 田村吉永1965『飛鳥京藤原京考証』綜芸社。

6） 青木敬2011「東方官衙南地区の調査 第162-1次」『奈文研紀要2011』。

7） 奈文研2006『高所寺池発掘調査報告』。

8） 奈文研1978「大官大寺下層遺跡の縄文式土器」『藤原概報8』。加藤雅士2009「大官大寺の縄文土器（1）」『奈文研紀要2009』。石田由紀子2010「大官大寺の縄文土器（2）」『奈文研紀要2010』。

9） 奈文研1980『藤原報告Ⅲ』（奈文研学報第37冊）。

10） 奈良県教育委員会『藤原宮 国道165号線バイパスに伴う宮域調査』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第25冊。

11） 奈文研1985「藤原宮東方官衙地域の調査（第38・41・44次）」『藤原概報15』。

12） 奈文研2006『高所寺池発掘調査報告』。

13） 奈文研1979「藤原宮第23-2次の調査」『藤原概報9』。小田裕樹「食器構成からみた「律令的土器様式」の成立」『文化財論叢Ⅳ』奈文研。

14） 奈文研1990「左京九条四坊の調査（第58-20次）」『藤原概報20』。

15） 奈文研1973「飛鳥資料館建設地の調査」『藤原概報3』。

16） 橿原市千塚資料館1991『平成２年度埋蔵文化財発掘調査速報』。

17） 明日香村教育委員会1990「奥山・リウゲ遺跡の調査」『明日香村遺跡調査概報―平成元年度―』。

18） 奈文研1994『藤原概報24』など。

19） 奈文研1994『藤原概報24』。

20） 露口真広2005「藤原京左京一・二条四坊」『大和を掘る23 2004年度発掘調査速報展』奈良県立橿原考古学研究所。

21） 奈文研2009『飛鳥藤原京木簡二』（奈文研史料第82冊）。市大樹2010『飛鳥藤原木簡の研究』塙書房。

22） 花谷浩2000「京内廿四寺について」『研究論集XI』（奈文研学報第60冊）に簡潔にまとめてある。

23） 奈文研1984「藤原宮西北隅地域の調査（第36次）」『藤原概報14』。

24） 高田貫太ほか2008「大極殿院南門の調査第148次」『奈文研紀要2008』。

25） 森川実ほか2015「藤原宮大極殿院の調査第182次」『奈文研紀要2015』。

26） 安田龍太郎2005「藤原宮周辺の方形区画」『飛鳥文化財論攷―納谷守幸氏追悼論文集―』納谷守幸氏追悼論文集刊行会。

27） 奈文研2009『飛鳥藤原京木簡二』（奈文研史料第82冊）。

28） 奈文研2003『吉備池廃寺発掘調査報告』。

29） 内田和伸・小澤毅・金井健2005「測量法改正（世界測地系導入）に伴う測量業務の対応」『奈文研紀要2005』。

30） 奈文研1994「飛鳥・藤原地域における地区設定基準の改定」『藤原概報24』。

2　調査の概要

藤原京左京六条三坊の地の約20,000㎡を対象として、1985年４月から1987年５月まで飛鳥藤原宮跡発掘調査部庁舎建設に伴う事前の発掘調査を実施した。これに加え、収蔵庫増築に伴う調査を2004年度に２回行った。調査面積は、対象地ほぼ全域の約16,970㎡となる。検出した遺構は、古墳時代から中世までおよぶ。主なものとしては、条坊道路２条、掘立柱建物83棟[1]、竪穴建物８棟、掘立柱塀45条、井戸38基、溝37条、土器埋納坑４基などであり、他に多数の土坑も検出している。遺物としては、東西大溝SD4130を中心に、木簡、瓦塼類、土器、土製品、木製品、金属製品、石製品、鋳造関連遺物等が出土した。本節では、各次数ごとに調査の概要を述べる。調査の進行状況や遺構の概略については、次節の調査日誌および各次数の遺構略図を参照されたい。

A　第45次調査

敷地全域にわたる試掘調査で、遺構の有無とその残存状況の確認を目的とした。調査地は６AJC-F・M・N区から６AJD-A・H・J区にわたる。幅６mのトレンチを東西に３本（Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ区）、南北に１本（Ⅲ区）設定した。Ⅰ区が敷地北半部の６AJC-F区に長さ80m、Ⅱ区は南半部の６AJD-A・H区にわたる延長130mである。６AJC-F区から６AJD-A区にかけては、Ⅰ区と直交する形で長さ100mのⅢ区を南北に設定した。西南部の６AJD-J区には、東三坊坊間路の確認を目的として、後に長さ15mのⅣ区を設定した。また、Ⅰ・Ⅲ区の交差部を中心に南北18m、東西18mの範囲で拡張し、中央区とした。ここではⅠ・Ⅲ区と中央区の概要を述べ、東三坊坊間路等を検出したⅡ・Ⅳ区の遺構については、第46次調査にゆずることとする。

検出した遺構は六条条間路SF4750とその両側溝、藤原京期から奈良時代の東西大溝SD4130の他、掘立柱建物、掘立柱塀、南北大溝SD4143、素掘溝などである。調査地は東北坪と東南坪の東半部で、溝を多数検出した他は掘立柱建物等の遺構密度は薄く、藤原京の明確な宅地割りの状況は認められないとされた。この時点では東北坪西南部に位置する藤原京造営期の区画塀SA4170・4171は藤原京期とみており、坪西半部では違った土地利用を推定している。SD4130は藤原京期から奈良時代を中心とし、中世に埋没する。東三坊大路推定位置にはSD4143が流れることを確認し、大路が存在していないことを指摘した。また、六条条間路に関しては、両側溝は検出していたものの、推定位置よりも北にずれるために条間路としての確証はつかめておらず、側溝も中世の溝かとされた。

B　第46次調査

第45次調査Ⅱ・Ⅳ区で東三坊坊間路と藤原京期の遺構を検出したため、東南坪西北部の様相を明らかにすることを目的として実施した。調査地は６AJD-H・J区である。古墳時代から７世紀、藤原京期、奈良時代、平安～鎌倉時代にかけての多数の遺構を検出し、当地の土地利用の様相が判明した。

東三坊坊間路は両側溝を検出し、規模は側溝心心で7.0～7.5mとなる。藤原京期を通じて存

続するとされた。側溝の脇にはそれぞれ東南坪、西南坪の周囲を画する塀がめぐるが、北側は削平が著しく、残存しない。坊間路上には藤原京期の東西棟建物SB4340を検出したが、この時点では側溝との重複関係から奈良時代の遺構と認識している。

他の藤原京期の遺構は重複関係から２時期に分かれ、Ａ期は掘立柱建物２棟、掘立柱塀５条、素掘溝３条、Ｂ期には掘立柱建物４棟、掘立柱塀３条があるとされた。特にＢ期の遺構は東南坪を東西にほぼ二等分する位置に南北塀を設け、規模のほぼ等しい掘立柱建物を計画的に整然と配置する等、官衙との共通性が指摘されている。また、東西棟建物SB4333は条間路の推定位置にあることから、東北坪との一体の土地利用も考えられた。

奈良時代に関しては、主殿SB4350と前殿SB4351の２棟の掘立柱建物を検出し、その西と北を掘立柱塀と素掘溝がめぐる状況が明らかとなり、邸宅風の遺構とみられた。

一方、藤原京造営以前の時期に関しても、多くの知見が得られた。古墳時代では、２群に分かれて分布する５世紀後半の竪穴建物７棟を確認した。これらの竪穴建物からは韓式系土器が出土し、注目されている。また、７世紀代の遺構としては小規模な掘立柱建物10棟、素掘溝３条等がある。この時期の瓦が調査区北半から多数出土し、北方に寺院の存在が推定された。瓦には吉備池廃寺[2]出土瓦との強い関連が示され、「池上」刻印瓦からは斑鳩地方の寺院との関連が推定された。

また、中世の遺構を多数検出した。それらは調査区内の３箇所にまとまりをもって分布しており、その周辺が集落の中心部であると判断できる。

Ｃ　第47次調査

東北坪西南部を中心とした地域（6AJC-N区、6AJD-H区）で、第45次調査区と第46次調査区から続く遺構の状況を確認することを目的とした調査である。藤原京期には少なくとも二町以上の占地であったことが確認でき、奈良時代にはこの地が「香山正倉」であった可能性が浮上した。

東西大溝SD4130は西への続きを確認するとともに、その南岸に接して大規模な井戸SE4740を検出した。この大溝や井戸は藤原京期から奈良時代にかけて存続し、中世に埋没したものである。土器をはじめ豊富な遺物が出土し、特に「香山」と記した墨書土器から、大和国正税帳にみえる奈良時代の「香山正倉」との関連がうかがわれた。

六条条間路は両側溝を検出し、やや北に偏しているものの、これが条間路であろうと判断した。第46次調査区で検出した２条の南北塀SA4286・4320は、それぞれ条間路上に門SB4726・4725が開き、SA4730・4729としてさらに北に延びることを確認した。これによって、左京六条三坊は、少なくとも東北坪と東南坪を一体として利用していたことが判明したのである。

また、第45次調査では藤原京期とみていた区画塀は７世紀代のものであることが判明し、南面中央に門が開く方形の区画の存在が明らかとなった。同時期の瓦が多数出土し、第46次調査と同様に瓦を用いた施設が周辺に存在することが予想されたが、遺構としては確認できていない。

調査区西北部では屈曲する中世の大溝を検出し、集落を区画するものであると考えられる。

D　第50次調査

敷地西北部で未調査地として残っていた部分の西区（6AJC-N区、6AJD-H区）と、第45次調査の所見では遺構が希薄であった、東南坪東北部の東区（6AJD-A区）における状況を探るための調査である。東三坊坊間路上に正殿SB5000を検出したことにより、左京六条三坊では藤原京期に四町占地の土地利用があったことが判明するという、画期的な成果が得られた。これらの遺構群は、官衙的な性格をもつとされた。

西区では東三坊坊間路上で、第46次調査で検出したSB4340の北約20mに、桁行7間、梁行4間で南に廂が付く大規模な掘立柱東西棟建物SB5000を検出した。この建物の身舎中心は左京六条三坊の中心と一致することから、藤原京期の建物と判断された。そして、第46次調査で検出した建物群や、奈良時代としたSB4340をも含めて計画的な配置関係がみられ、藤原京期に四町占地の時期があることが明らかとなった。また、六条条間路は南側溝SD4311が東三坊坊間路東側溝と接続することが判明し、推定位置よりは北に偏するものの、条間路である蓋然性が高まった。

東西大溝SD4130からは霊亀3年（717）の紀年がある稲の収納に係わる木簡が出土し、第47次調査で出土した「香山」銘の墨書土器と合わせて、この地が奈良時代には「香山正倉」であった可能性が強いと考えられた。なお、SD4130北の調査区西北隅では3間×3間の小規模な総柱建物を検出した。これは正倉に関わる遺構である可能性が指摘され、正倉本体はさらに西方に展開するか、と考えられた。

遺物では緑釉獣脚硯が注目され、木簡には稲の収納に関わるものや、「左京職」「菜取司」の官衙名を記したものがある。

東区では、第45次調査で一部確認していた方形区画の続きを検出した。これは二重の区画となることが判明したが、東側は削平のために失われている。調査区東端の東三坊大路推定位置には、第45次調査と同様に南北大溝SD4143を検出した。この溝は奈良時代以前まで遡ることが判明し、藤原京の東堀河かと考えられた。

E　第53次調査

一連の最後の調査で、これまでの未調査地の様相を解明することを目的とした。調査地は、当初第45次調査区東方の東北坪南東部（北区：6AJC-F区、6AJD-A区）と、第46次調査区東方の東南坪北東部（中区：6AJD-A・B・H・J区）の2箇所に設定したが、後に第46次調査区南方での、東三坊坊間路の未調査地（南区：6AJD-J区）に調査区を設けたため、計3箇所となった。

北区と中区は遺構密度が希薄で、方形区画の区画塀の延長や中世の小規模な建物が点在するのみである。調査区東端ではSD4143の西肩を検出し、香具山西麓を直線的に北流することが判明し、藤原京の東堀河である可能性が高まったとされた。

南区では東三坊坊間路の両側溝とその東西の掘立柱塀を検出したが、遺存状況は不良で、側溝は南端が削平されている。また、藤原京期の施設の南端を区画する掘立柱塀の検出も期待されたが発見できず、区画はさらに南方まで展開することが判明した。

Tab. 2　発掘調査一覧

調査次数	調　査　地　区		調　査　期　間	調査面積
45次	6AJC-F・M・N	6AJD-A・H・J	1985. 4. 3～1985. 9. 21	3,410㎡
46次	6AJD-H・J		1985. 8. 6～1986. 1. 28	5,965㎡
47次	6AJC-N	6AJD-H	1985. 11. 28～1986. 6. 20	2,500㎡
50次	6AJC-N	6AJD-A・H	1986. 7. 28～1986. 12. 19	2,500㎡
53次	6AJC-F	6AJD-A・B・H・J	1987. 2. 13～1987. 5. 12	3,030㎡
133-7次	5AJC-M・N		2004. 9. 4～2004. 10. 25	343㎡
133-13次	5AJC-F・N		2005. 3. 7～2005. 4. 18	200㎡

F　第133-7・13次調査

新庁舎が完成した後、新収蔵庫建設に伴う事前調査である。調査地は第45次調査区の北側で、第133-7次調査が5AJC-M・N区、第133-13次調査が5AJC-F・N区となる。

第133-7次調査区では藤原京期の遺構は希薄であったが、南から延びる7世紀代の掘立柱塀SA4170を2間分検出し、それより北には延びないことを確認した。

第133-13次調査では第45次調査区から延びる遺構を確認するとともに、新たに藤原京期の井戸1基を検出した。また、礎石の座った据付掘方を1基検出したが、建物としては確認できない。

G　関連調査

新庁舎建設に伴う調査ではないが、本調査地の理解に資する周辺の調査成果について、再度整理しておく。

1977年に調査地西を通る市道拡幅の事前調査として、第21-2次調査を行った。三条大路から六条大路南まで長大な南北トレンチを入れたもので、本調査地に関わるものとしては、六条条間路南側溝を検出した。他にSD4130をはじめ、大規模な溝3条も確認している。

1978年度に六条条間路推定位置から西南坪にかけて行った第23-2次調査では、推定位置に条間路は検出できず、藤原京期の掘立柱南北塀があることを確認した。その他には藤原京期の掘立柱建物1棟と飛鳥Ⅲの土器を出土する井戸1基、藤原京期以前の斜行溝1条等を検出した。

第37-7次調査は、1983年に畝尾都多本神社の向かいの西北坪で行った。7世紀代の斜行溝から型押し忍冬文軒平瓦が出土し、付近に寺院が存在していた可能性が高まった。

1987年4月には、調査地西側の店舗の作業所新設に伴い、第54-1次調査を行った。左京六条三坊西北坪の東南部にあたり、東西大溝SD4130の西延長部となる。SD4130はその南肩を検出したものの、推定位置より北に約10m偏していた。その結果、SD4130は間の未調査地で曲がることが推定された。出土遺物には尾張国の荷札木簡や7世紀中頃の瓦[3]があり、第47次調査での所見と同様、付近に寺院の存在が指摘されている。

1）棟門3基を含む。
2）当時は吉備池廃寺の調査前で、吉備池瓦窯として認識されており、そこで焼成した瓦とみている。
3）一部は奈文研2003『吉備池廃寺発掘調査報告』で紹介している（83頁Fig. 60-20）。

3　調査日誌抄

A　第45次調査　6AJC-F・M・N区、6AJD-A・H・J区
1985年4月3日～9月21日

4.3　基準点測量。

4.17　発掘区を幅6mで設定。Ⅰ区東西長80m。Ⅱ区東西長約130m。Ⅲ区南北長約100m。面積は約1,800㎡。耕土上面より磁気探査を実施。

4.22　発掘作業開始。重機にて表土掘削開始。

4.23　重機掘削。

4.24　重機掘削終了。

4.25　調査地整備。

4.26　2回目の磁気探査を実施。

4.30　発掘準備。ベルコンを設置。

5.1　人力による掘り下げ開始。Ⅰ区：暗褐土の下は灰褐色砂質土で、藤原宮期の遺物を含む。Ⅲ区：床土下の暗褐土で中世の小溝を検出。

5.2　Ⅰ区：小型柱穴列あり。穴は浅く、中世のものかと思われる。Ⅲ区：暗褐土掘り下げ。

5.4　Ⅰ区：耕作溝検出。Ⅲ区：暗褐土掘り下げ。

5.7　Ⅰ・Ⅲ区：耕作溝を検出し、掘り下げる。

5.8　Ⅰ区：包含層の掘り下げ開始。小柱穴列SA4121は7間となる。

5.9　Ⅰ区：西端NF14～16地区で、東西柱穴列（SB4761）検出。FG88～90地区で東西大溝（SD4130）検出。土坑とみていたが、幅約3mの溝となる。

5.10　Ⅰ区：SD4130掘り下げ。遺物多い。西端部はSB4761周辺の精査。

5.11　Ⅰ区：SD4130掘り下げ。Ⅲ区：遺構検出。

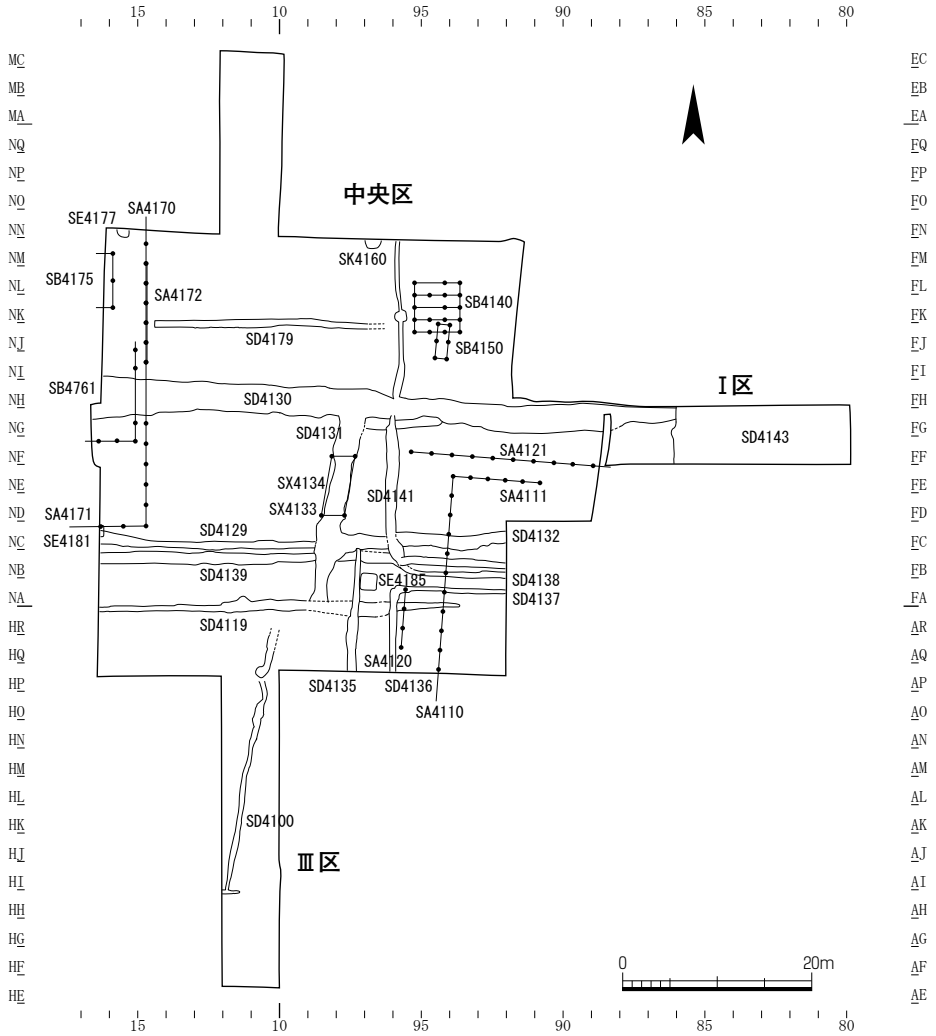

Fig. 7　第45次調査 Ⅰ区・Ⅲ区・中央区　1:800

5.13　Ⅰ区：92地区でSD4130掘り下げ。やや溝幅は狭くなる。Ⅲ区：灰褐色土上面で遺構検出。

5.15　Ⅰ区：SD4130掘り下げ。95地区の上層で8基の石を検出。溝中に投げ込まれたものか。Ⅲ区：HK～N地区の東壁沿いに4基の柱穴列確認。

5.16　Ⅰ区：98ラインから東へ進む。現在の面では遺構検出は難しく、粘質砂層を数cm下げて灰色粘土の肩を出す。SD4130上層は遺物が少なく、下層は未掘。Ⅲ区：HG～K地区にて耕作溝検出。

5.17　Ⅰ区：97地区で、SD4130に注ぎ込む南北溝（SD4131）を検出。流木がSD4131の壁内にもぐっていることから、さらに古い時期の自然流路があったとみられる。Ⅲ区：南端HF区まで遺構検出終了。清掃後、写真撮影。再び北へ向かって遺構検出。

5.18　Ⅰ区：西半部の写真撮影。87ライン以東の遺構検出開始。Ⅲ区：遺構検出。

5.20　Ⅰ区：86ライン東で、灰褐色の粘質砂面が中世の削平により急速に落ちる模様。SD4130も削られて、以東はなし。Ⅲ区：10地区の斜行溝（SD4100）はさらに北東へ続く模様。遺物は瓦が少量のみ。

5.21　Ⅰ区：耕作溝検出続行。Ⅲ区：HQ・HRラインに東西小柱穴列あり。深さ5cm前後と浅い。

5.22　Ⅰ区：SD4130掘り下げ。午後に写真撮影。Ⅲ区：NC～F地区には小穴が多い。

5.23　Ⅰ区：瓦器の入った褐色土を掘削し、橙褐色砂面を出す。Ⅲ区：東西柱穴列（SB4761）と南北柱穴列（SA4170）を再度検討して確定する。SB4761は南側に対応する穴がなく、北へ延びる南北棟建物とみられる。東側の柱穴列（SA4170）は建物より新しく、塀とみられる。

5.27　Ⅰ区：東端から灰色粘土を掘り下げる。Ⅲ区：遺構検出。ほぼ北まで行きついて、折り返し清掃を開始。

5.29　Ⅰ区：遺構検出。86ライン付近で、南北大溝（SD4143）の西岸検出。Ⅲ区：清掃。

5.30　Ⅲ区とⅠ区東半を清掃後、写真撮影。Ⅱ区の調査開始。Ⅱ区は東区と西区があり、東区はさらに10ライン上の農道をはさみ、東半（A地区）と西半（H地区）に分かれる。東区から開始し、東半で南北方向の耕作溝検出。

5.31　本日よりⅡ区に専念。西半で耕作溝検出。東半は顕著な遺構なく、東端まで遺構検出終了。

6.1　東区西半は、10～12地区で遺構検出。東半は写真撮影。

6.3　西半は、15～16地区で柱穴検出。南北棟（SB4240）となる。東半は西から遺構検出。

6.4　西半は18ライン西に南北塀（SA4320）を2間分検出。掘方は南北に長く、いずれも抜取穴あり。22地区で南北棟（SB4242）検出。16地区のSB4240と柱筋を揃える。東半は耕作溝検出。

6.5　東区：東端まで行き着く。西区：調査開始。

6.6　東区：西半、東半の両トレンチ写真撮影。東半は東端で厚さ約15cmの茶褐土の残りを掘りながら、西へ進む。西区：耕作溝検出。

6.7　西区：28～30地区で円形の小穴を多数検出。柱痕跡があり、古い瓦器が埋土に入る。31地区の暗褐土中より、重弧文軒平瓦1点出土。東区：東半の86地区で径2m弱の円形の凹みを検出。井戸（SE4031）か。

6.8　西区：HC31～33地区に10尺間隔で並ぶ柱穴（SB4332）検出。建物の南妻となるようで、いずれも抜取穴がある。掘方は一辺1.5mの大型。東区：東端の灰青粘土層を掘り下げる。川の堆積層か。86地区の井戸（SE4031）より瓦器が出土。

6.10　西区：西端から戻り始める。東区：井戸（SE4031）の掘り下げ。12～13世紀の土器や曲物が出土。

6.11　西区：西端の坊間路東側溝かと考えられる溝は明確でなく、西南の水田に新たに調査区を設定し、そこで溝が検出できなければ戻って来て再検討することにする。東区：SE4031の底に曲物を確認する。

6.12　西区の西南に新たにⅣ区を設け、重機掘削開始。東区：SE4031周囲の清掃後、写真撮影。

6.14　Ⅳ区：西から遺構検出を始める。西端42ラインに南北溝（NR4226）検出。新旧2条の溝となるか。41ライン上に、南北塀（SA4283）検出。

6.15　Ⅳ区：39地区で南北溝（SD4302）検出。

Fig. 8　調査風景（第45次）

Fig. 9　SE4031調査風景

6.17　Ⅳ区：SD4302掘り下げ。埋土は硬く締まっており、水の流れた痕跡なし。壁は切り立ってしっかりしている。西端の溝との間隔は心心で８ｍで、この間が坊間路とも考えられるが、この溝は推定位置より西にずれる。旧道の畦溝の可能性もあり、東に５ｍ拡張して再確認することとする。本日よりⅠ・Ⅲ区の交点周辺に重機を入れて、東西34ｍ、南北39ｍの範囲で拡張開始。中央区とする。旧Ⅲ区は敷地際まで約20ｍ北へ延ばし、北拡張区を設定。

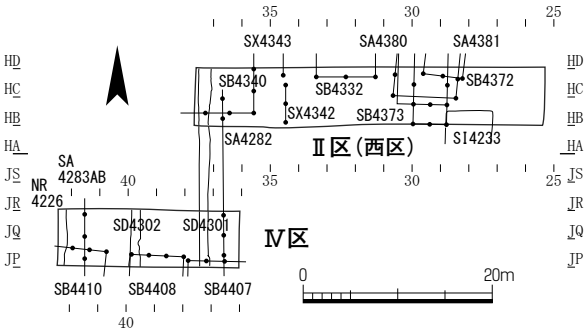

Fig. 10　第45次調査 Ⅱ区（西区）・Ⅳ区　1:800

6.19　Ⅳ区：37地区でSD4302と同様の埋土の溝（SD4301）を検出し、この間が坊間路となる模様。溝幅0.6ｍ。水の流れた痕跡なし。36地区で、南北塀（SA4282）の柱穴を９尺間隔で２間分検出。宅地西限を画する塀とみられる。

6.20　Ⅱ区：Ⅳ区での知見をもとに、西区西端を精査。SD4301の延長部を確認。幅はわずかに広くなっている。溝が埋まった段階で、大型の柱穴（SB4340）を掘っている。SA4282の延長部は、南に１基あるようだが浅く、北には続かない。

6.21　Ⅳ区：写真撮影。中央区：重機掘削終了。西北部にベルコン設置。以後は中央区に専念。

6.24　中央区：既検出の旧Ⅲ区西端から西へ向けて遺構検出。

6.26　14ライン西で南北方向の柱穴列（SA4170）検出。各柱穴間に楕円形の別の柱穴らしきもの（SA4172）があり、輪郭はやや不鮮明。鮮明な方の柱穴列は、南で既に検出済みの塀（SA4170）の北延長とみられる。16ライン東に３基の柱穴列検出。東西大溝（SD4130）の下層も掘り始める。

7.1　Ⅱ区：遺方設定。

7.4　雨天が続いていたが、本日は久しぶりに作業が進行。輪郭を確認しながら柱穴を掘り下げ。15ライン西で南北柱穴列（SB4761）の北延長部の柱穴を探すが、確認できず。東北部はSD4130の肩を検出しながら東へ進む。

7.5　FM96地区の北壁部分で、灰褐土をやや掘り下げた段階で瓦散布面（SK4160）を検出。ほぼ平面に落下した状態のもの。SD4130は、上層埋土のみ掘り進める。

7.6　瓦散布面（SK4160）は、黒褐色土の地山上に貼りついている様である。

7.8　93～95地区の遺構検出。柱穴集中部確認。

7.9　92～94地区遺構検出。Ⅱ区、Ⅳ区：実測。

7.10　柱穴集中部を精査。建物（SB4140・4150）を検出。SD4130の上・中層を掘り下げる。

7.11　東南部の灰褐土を掘り下げる。SD4130は南岸に沿って石が散布。一部を残す。

7.12　東南部99ライン以東の遺構検出。

7.13　96ラインの瓦器が入る南北溝（SD4141）は、Ｃラインの南で東に折れ曲がるらしい。

7.15　94ラインで、やや北で東に振れる柱穴列（SA4110）を10間分検出。北端は東に折れて東西柱穴列（SA4111）となり、２間分を検出。

7.16　92～94地区の遺構検出。SA4111はさらに１間分検出。Ｌ字形の溝（SD4141・4138）は瓦器を含み、中世の溝とみられる。

7.17　92～97地区精査。南北塀（SA4120）検出。

7.18　Ｃラインの東西溝（SD4129）掘り下げ。藤原宮期の土器出土。南北溝（SD4131）との重複関係を精査し、SD4129の方が新しいことを確認。東西溝（SD4132）は、SD4131より西への延長が判然としない。97ラインの南北溝（SD4135）はＣラインの東西溝（SD4132）より古いが、その北への延長部にはない。

7.19　SD4131掘り下げ。Ｑ～Ｃ地区にかけては瓦が多い。SD4132との関係は、当初下層の南北溝があり、その後SD4132を掘削してト字形の流れの時期（上層）があるとみられる。SD4131北半の溝底両側には、護岸状に杭が連なっている。

7.20　12ライン付近で遺構検出。

7.22　ヘリコプターにて発掘状況写真撮影。

7.23　14～16地区の遺構検出。南北塀（SA4170）はNDライン東西塀（SA4171）と接続することを確認。

7.24・25　清掃。

7.26　写真撮影。

7.27　遺方用杭打ち終了後、貫板打ち。北拡張区遺構検出開始。

7.29　遺方設定。北拡張区遺構検出。

7.30　北拡張区遺構検出。Ⅱ区実測開始。

7.31　東西塀SA4111・4121の延長部を確認するため、89～92ライン間の旧Ⅰ区の南に沿う形で、南北６ｍ、東西８ｍ拡張。

8.1　Ⅱ区：実測、標高記入まで終了。Ⅲ区：南半部埋め戻し。Ⅰ区：東半部で地山確認のためにサブトレンチを設定し、掘り下げ開始。

8.2　中央区：拡張区のＥライン上にSA4111の掘方２基検出。その東側の所定位置には掘方は検出できず。Ⅰ区：サブトレンチは礫層に到達。礫層

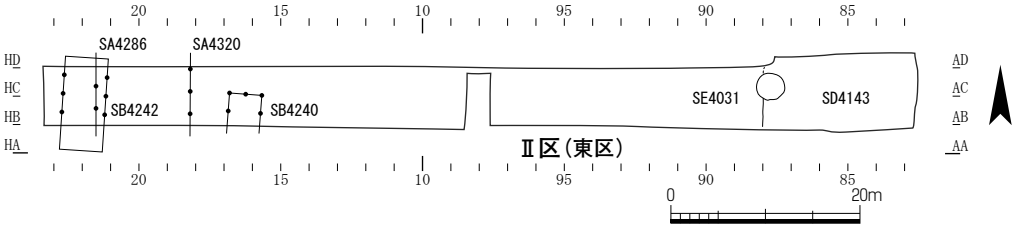

Fig. 11　第45次調査 Ⅱ区（東区）　1:800

直上まで瓦器が出土。礫層中からは弥生土器や瓦片などが出土。著しく磨滅している。

8.3　Ⅰ区：サブトレンチ掘り下げ。堆積層が下に続くようであるが、湧水が激しく、壁も崩れ始めたため、掘り下げを断念。

8.5　Ⅱ区：東端に幅1ｍ、長さ9ｍのサブトレンチを設定。1ｍ掘り下げた所で礫層にあたり、下に砂の堆積が続く。砂層の掘り下げは、壁が崩れてきたために断念。

8.6　北拡張区：平面実測。標高記入。記者発表。

8.7　中央区：東北隅の溝状遺構掘り下げ。南側へ下降する低地の整地層であることを確認。柱穴の断ち割りを始めるが、雨のため中断。Ⅰ区：東半埋め戻し。

8.8　柱穴断ち割りを本格的に開始。

8.9　北拡張区北端の西壁際を掘り下げ。古い溝か土坑があることが判明。南北溝（SD4131）は、護岸（SX4133）内の堆積土を完掘して底を確認。

8.10　瓦散布面（SK4160）精査。瓦は土坑状の窪みに入ったものであることを確認。SD4131は、FDラインで溝の両岸に沿って大小の柱穴らしきものを検出。

8.12　SD4131はFDラインの両岸の柱穴に対応して、FFラインにも2基の柱穴があることを確認。この4基の柱穴は橋状遺構（SX4134）となり、この部分が東西方向の通路となっていたらしい。本日にて調査終了。埋め戻しは次班に引き継ぐ。

8.17　砂入れ。柱穴埋め戻し。

8.22　埋め戻し開始。

9.21　埋め戻し終了。

B　第46次調査　6AJD-H・J区
1985年8月6日～1986年1月28日

8.6　調査区縄張り。面積約4,200㎡。重機で表土掘削開始。

8.7～10　重機掘削。

8.12　ベルコン設置。西壁を整え排水溝を掘る。西から包含層を掘り下げ、遺構検出開始。

8.13　41ラインで塀と思われる柱穴列10基検出（SA4283）。

8.14　北半部の遺構検出。北西隅の水田は一段と低く地下げしており、遺構検出面は深い。遺構は消失しているか。

8.17　盆期間の土曜日のため、第45次調査区砂入れ。柱穴埋め戻しのみ。

8.19　坊間路西側溝（SD4302）を検出。深さ約10㎝と浅い。

8.20　SD4302掘り下げ。南に行くにつれて浅くなるが、北は約30㎝の深さあり。北西隅の水田部分の遺構は、ほとんど削平されている。

8.21　JK38地区で井戸と思われる大土坑検出（SE4462）。

8.22　SE4462を一段掘り下げる。

8.23　坊間路東側溝（SD4301）を一部検出。西側溝よりやや深い。2間×2間の建物（SB4408）検出。側溝より新しく、柱穴埋土より瓦器出土。

8.24　JR・S37地区で東側溝（SD4301）検出。東肩にからんで柱穴（SB4405）が見える。柱穴を残しながら東側溝を掘り下げる。

8.26　東側溝（SD4301）を南から北まで検出。JOライン以北ではきわめて深くなり、逆台形の断面形となる。遺物はきわめて少ない。JS37地区で、側溝埋土上面で検出できる柱穴1基（SX4349）を確認。HB37地区の第45次調査既検出の方形柱穴状遺構（SB4340）は柱痕跡が明確でなく、SD4301より新しい。

8.27　36ラインで南北塀（SA4282）の柱穴12基検出、既検出分と合わせて14間となる。JS36地区で井戸と思われる山土を含む大土坑（SE4463）検出。HG36地区で、HG37地区で検出したものと同様の柱穴を検出（SX4344）。

8.28　SE4463は南寄りに円形の井戸枠抜取穴あり。13世紀の瓦器を含む。SA4282の柱穴はHA地区でその痕跡を確認したが、それ以北では点々とわずかに残るだけで、既に削平されているか。

8.29　JI～K35地区で柱穴3基（SB4291）検出。北妻柱があるようで、南北棟になるか。

8.30　JI・J34地区でSB4291の東側柱4基検出。南妻は調査区外にある。HD35地区の方形土坑（SB4340）の南方で、同形同大の土坑2基を南北に検出。北側のものは中央に東西方向の柱抜取穴風の土坑が重複。南側は輪郭を確認したのみで、性格不明。

8.31　HC・D35地区で検出した土坑群周囲を精査し、計9基の大柱穴（SB4340）と判明。東側溝（SD4301）よりは新しい。東西3間以上、南北3間の建物になると思われる。

9.2　33ラインで浅い南北溝SD4358検出。その東に柱穴5基検出（SA4356）。HD～G33地区でSB4332の大柱穴4基検出。南端の柱穴は東側へ、他は西側へ柱抜取穴が延びる。

9.3　SB4332の柱穴4基を掘り下げる。柱掘方は一辺1.5m程度。柱間は2.7～2.8m。

9.4　33ラインで検出した溝（SD4358）はJSラインで東へ曲がることが判明（SD4357）。南北塀（SA4356）も同じく東へ折れる（SA4355）。南北棟建物（SB4332）東側柱列の南から2基目の柱穴検出。北端で布留式中段階の土器を含む古墳時代の大土坑（SI4236）検出。

9.5　SB4332東側柱の柱穴4基検出。柱は全て東へ抜き取る。JS30地区周辺で、竪穴建物と思われる方形の大土坑（SI4235）検出。埋土中より布留式土器出土。JOラインで柱穴5基（SA4284）が東西に並ぶ。JMラインで、東西に並ぶ柱穴3基（SB4243）検出。

9.6　JP～R29・30地区にかけて、池状の大土坑（SK4390）検出。西岸に沿って点々と玉石が並ぶ。平安時代の黒色土器出土。古墳時代の竪穴建物（SI4235）は、東側に別の竪穴建物（SI4234）が重複している。

9.7　HA27・28地区で大土坑（SI4233）の南半を一部検出。古墳時代の竪穴建物と思われる。

9.9　JJ・K27地区で柱穴3基検出。東西棟建物の西妻か。JN～P27地区で柱穴3基（SB4350）検出。東西塀（SA4284）と重複し、塀より新しい。

9.10　JJ・K26地区で柱穴2基を検出し、昨日検出した3基と合わせて東西棟建物（SB4351）になる。別の柱穴列（SB4290）と重複し、SB4351が新しい。JN・O26地区の柱穴2基は東西棟建物（SB4350）になる。SB4350とSB4351は西の柱筋を揃えており、間隔は8.2m（27尺）である。HE・

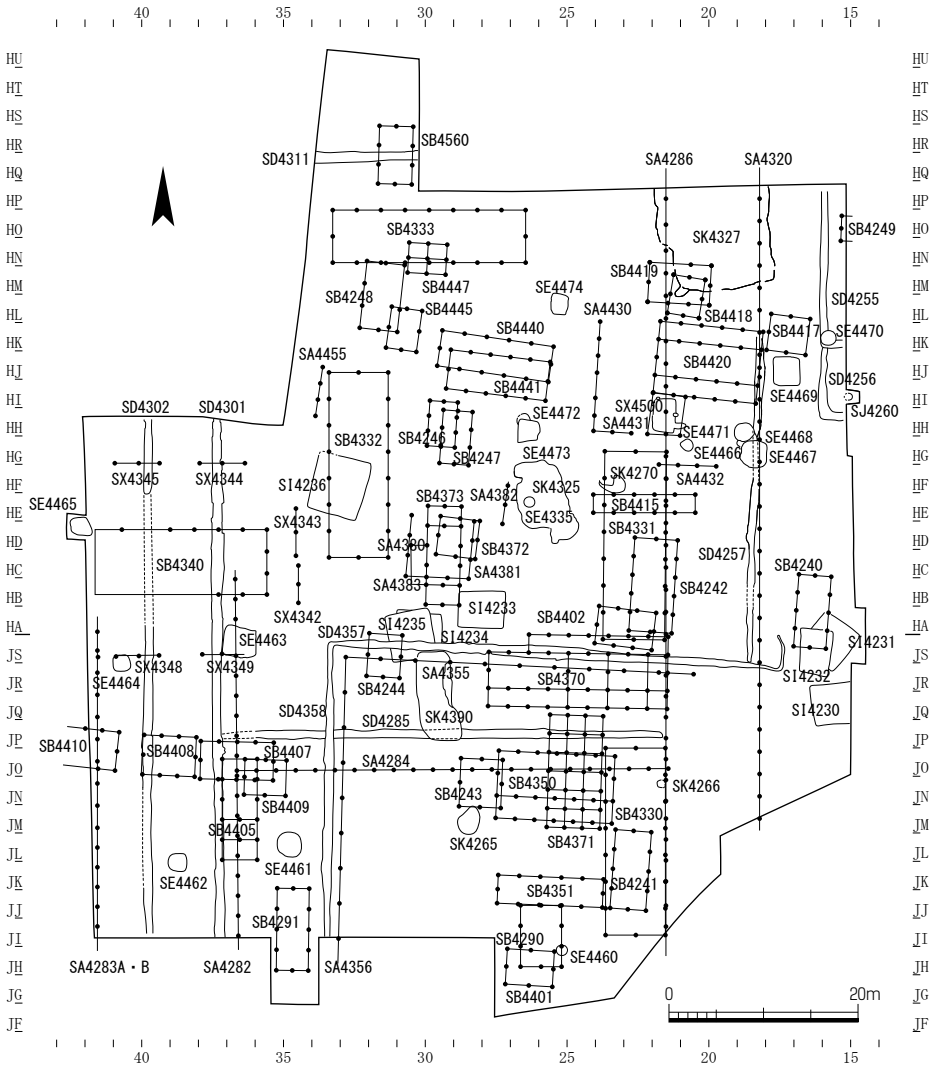

Fig. 12　第46次調査区　1:800

F27地区では、山土を含む大土坑（SK4325）がある模様。瓦の出土量やや多くなる。

9.11　SB4350は3間以上×3間の東西棟建物で、南廂を有することが判明。

9.12　SB4351と重複するSB4290は南北棟建物であることを確認。大土坑（SK4325）は輪郭を検出。単弁八弁軒丸瓦、瓦片、かえり付きの須恵器杯蓋などが出土。

9.13　SB4351は5間×2間でまとまる。23ラインで新たに柱穴5基（SB4330）検出。SB4351の柱穴と重複しており、それより古い。南北棟建物の西側柱筋になるか。大土坑SK4325の東肩検出。輪郭確認にとどめ、掘り下げず。

9.14　SB4350の東妻柱列検出。6間×3間で南廂付の東西棟になる。SB4351と同じく方位が北で東に振れ、他の柱穴との重複関係もSB4350・SB4351は最も新しい。同時期の建物と思われる。23ラインで南北に並ぶ柱穴8基（SB4330）を検出。重複関係はSB4350・4351より古い。藤原宮期の建物か。SB4330と重複して柱穴5基（SB4241）検出。SB4330より古い。大土坑（SK4325）はほぼ全形を確認。

9.17　SB4241は4間×2間の南北棟となる。21ライン付近の精査。JL～P地区で複雑に重複する柱穴を多数検出。7間×2間の南北棟建物（SB4330）としてまとまりそうだが、これより新しい時期の柱穴群が確実に存在する。小柱穴建物（SB4370）は東西8間以上になる。JS～HE地区で柱穴6基（SB4331）検出。いずれも西側へ柱抜取穴あり、藤原宮期か。SB4290の規模確定のため、調査区南端27ラインより以東を拡張。

9.18　21ラインで、調査区全域にわたり南北に連なる柱穴列（SA4286）検出。SB4330の柱穴と重複し、SB4330が新しい。東西塀（SA4284）は22ラインまで続くが、それ以東は不明。その北の東西溝（SD4285）は、22ラインのSA4286付近で消滅。5間×2間の南北棟建物（SB4242）検出。南北塀（SA4286）より新しい。南拡張区重機掘削終了。北側の15～34ライン間に南北18mの幅で拡張区を設け、東から重機掘削開始。

Fig. 13　調査風景（第46次）

9.19　18ライン西で南北塀（SA4320）を12間分検出。JSラインの東西溝（SD4357）と重複し、塀の柱穴が古い。SD4357は、17ライン西で北へ直角に曲がることが判明。

9.20　SA4320を15間分検出。その西側で南北溝（SD4257）検出。SA4320と重複し、塀が新しい。4間×2間の南北棟建物（SB4240）まとまる。2棟重複する竪穴建物（SI4231・4232）検出。西側のSI4232が新しい。壁に沿って木炭や焼土が顕著で、焼失建物か。南側でも竪穴建物（SI4230）検出。北拡張区：重機掘削続行。

9.21　竪穴建物SI4232掘り下げ。韓式系土器出土。北拡張区：灰色砂の面で遺構検出開始。

9.24　竪穴建物（SI4231・4232）の埋土を掘り下げる。新しいSI4232は北壁に竈あり。完形品に近い土師器杯や高杯出土。北拡張区：掘り下げは、まだ遺構面まで達していない。瓦器、土師器皿等が多く出土。

9.25　竪穴建物（SI4232）を床面まで掘り下げる。底面上に炭化材が放射状に点在し、焼失建物と確認。北拡張区：18～21ライン間を遺構面まで掘り下げる。

9.26　HH15地区以北で南北溝（SD4255・4256）検出。HHラインで東へ曲がる。瓦を多量に含み、「池上」刻印を有する丸瓦出土。

9.27　SI4232の炭化材を精査し、写真撮影。終了後、土器を取り上げる。HJ17地区で一辺3m近い方形の掘方を有する石組井戸（SE4469）検出。石組内より瓦器、土師器皿など出土。北拡張区は遺構検出を続行。

9.30　北拡張区で南北塀（SA4320）の柱穴7基検出。HG18地区で土坑（SE4467）検出。花形飾金具出土。

10.1　21ラインの塀と建物の重複関係を精査。東西塀（SA4284）が最も古く、南北塀（SA4286）が次ぎ、南北棟建物（SB4330）が最も新しい。北拡張区：遺構検出を続行。

10.2　SB4330は南妻を検出し、7間×2間となる。南北塀（SA4286）は、HAライン以北は南北棟建物（SB4331）の柱穴が重複しており、SB4331が

Fig. 14　調査風景（第46次）

新しい。北拡張区：中世の柱穴群を検出。

10.3　南半は遺構再検出。北拡張区でSB4331の北妻を検出し、7間×2間の南北棟建物としてまとまる。西側柱の北から第2柱穴は瓦溜（SK4270）と重複。SK4270が古く、柱穴が新しい。SK4270からほぼ完形の単弁八弁軒丸瓦が出土。

10.4　北拡張区で塼仏出土。夏見廃寺出土例と同笵の中尊頭光部分の小片。HE25地区の西に広がる大土坑（SK4325）を掘り始める。南拡張区のJH・I25地区で柱穴3基検出。南北棟建物（SB4290）の東側柱になりそう。

10.5　SK4325は東南隅に不整形の土坑が重複していることが判明。丸瓦、平瓦、土師器、須恵器、フイゴ羽口、鉄滓、銅滓と、藤原宮式軒丸瓦1点出土。中央部は清掃を兼ね、遺構再検出。

10.7　SK4325を一段掘り下げる。27ライン以西は浅くなり、痕跡程度。北拡張区では多数の小柱穴、小穴群を検出。竪穴建物（SI4233）を東西に畦を残して耕作溝群の底まで掘り下げる。

10.8　HG・H28・29地区で東へやや振れる3間×2間の南北棟建物（SB4247）検出。7世紀後半の建物か。2棟の竪穴建物（SI4234・4235）を耕作溝群の底近くまで掘り下げる。

10.9　藤原宮期の南北棟建物（SB4332）東側柱の柱穴3基検出。7間×2間で確定。昨日検出したSB4247の、西北方に重複して建つ南北棟建物（SB4246）検出。これも3間×2間になるか。

10.11　SB4332の北妻柱検出。HE32地区以西に広がる竪穴建物（SI4236）の全形確認。北壁やや東寄りに竈らしき焼土あり。昨日までに検出した南北棟建物2棟（SB4246・4247）の重複関係は、SB4246が古い。

10.12　東西棟建物（SB4340）の東に、南北柱穴列（SX4342・4343）検出。

10.14　SB4340の柱穴を精査。いずれも柱抜取穴明瞭。遺物は新しいものを含まない。坊間路東の南北塀（SA4282）は北半を精査するが、HCライン上でかろうじて底が残る柱穴1基を検出したのみ。北半は削平されたものと考えられる。東西塀（SA4284）は37ラインまでは確実に延び、南北塀（SA4282）の柱穴と重複するか、あるいは取り付くか。

10.15　JR～HA間の西側溝（SD4302）を完掘。HEライン以北で西側溝の延長部を検出。

10.16　坊間路西の南北塀（SA4283）の柱穴を検出し、掘り下げる。北側に古い柱穴が重複するものあり。HD40地区でSB4340の柱穴を検出し、6間以上となる。北辺西端に幅10m、長さ15mの拡張区を設定。

10.17　記者発表。現地説明会準備。清掃。

10.18　現地説明会会場設営。北拡張区は重機掘削後、遺構検出。東西棟建物（SB4333）の西より3間分検出。南側柱筋西より2つ目の柱穴は、その南の建物（SB4248）の柱穴より新しい。HRライン付近で東西溝を検出。条間路南側溝か。

10.19　現地説明会。

10.21　北拡張区遺構検出。調査区北半再検出。

10.22　SB4333の規模確定のため、北拡張区を南北10m幅で調査区東端までさらに拡張し、表土掘削。調査区北半は遺構再検出。

10.23　SB4333は7間目まで確実だが、以東の柱穴は不明瞭。調査区南半遺構再検出。

10.24　SB4333の規模は7間×2間で確定。21ライン西で南北塀（SA4286）の柱穴らしきものを1基検出するが、北では未確認。30～35ライン間を北へ8m拡張し、重機掘削開始。

10.25　南北塀（SA4286）の柱穴6基検出。重複して大土坑（SK4327）あり。18ラインの南北塀（SA4320）は、この土坑により見えない。16ラインの南北溝（SD4255）は北へ延びる模様。

10.26　北拡張区の遺構検出。条間路北側溝は検出できず。東北隅で南北溝（SD4255）を検出。北へ向かって浅くなっている。溝の東に、柱穴3基（SB4249）が南北に並ぶ。SK4327の輪郭を確認し、掘り下げを始める。南北塀（SA4320）の柱穴は、土坑に覆われているようだ。

10.28　南北溝（SD4255）を底まで完掘。大土坑（SK4327）は、SA4320の柱穴を探すため底まで掘り下げる。7世紀末～8世紀の土師器、須恵器が比較的多量に出土。SA4320の柱穴4基はSK4327

Fig. 15　現地説明会（第46次）

Fig. 16　現地説明会（第46次）

によって破壊されていることを確認。東西棟建物（SB4333）の東妻柱を確認し、一段掘り下げる。遺構検出終了。

10.29　空撮に備え清掃。

10.30　終日排水作業を行う。

10.31　終日排水作業。清掃。標定点打ち、測量。

11.1　排水作業。清掃。空撮。

11.2　清掃。南半の建物を中心に写真撮影。

11.7　排水作業後、一部清掃。

11.8　北半を清掃。写真撮影。

11.9　清掃。写真撮影。

11.11　排水作業。清掃。写真撮影

11.14　排水作業。清掃。

11.15　清掃。写真撮影。

11.16　清掃。写真撮影。杭打ち開始。

11.18・19　遣方設定。水糸配り。

11.20～22・25・26　平面実測。

12.2　平面実測。標高記入。断ち割り調査開始。南端のSB4291の規模確定のために南に拡張し、精査。建物は3間以上となるか。

12.3　実測終了。標高記入。南拡張区で柱穴5基検出。SB4291は4間×2間の南北棟建物となる。柱穴断ち割り。JM28地区、飛鳥Ⅲの土器が入る土坑（SK4265）東西畦の掘り下げ開始。

12.4　柱穴断ち割り。竪穴建物（SI4232）の畦を撤去し、掘り下げる。床面は重複するSI4231の方が深い模様。SB4241・4330・4351の新旧関係を再確認。SB4351の柱痕跡底には玉石を据えている。JH25地区のSE4460掘り下げ開始。

12.5　標高記入終了。柱穴断ち割り。HE25地区の大土坑（SK4325）を南北に畦を残して掘り下げる。中央が深い。南側にチョウナ削り屑の腐ったものが多い。型押し忍冬唐草文軒平瓦1点出土。

12.6　SK4325掘り下げ。畦の土層観察より円形土坑（SE4335）がSK4325上面より掘り込んでいることが判明。東方に隅丸方形の深い部分あり。木簡状木製品数点や、軒丸瓦、丸・平瓦、土器多数出土。SB4350の柱穴断ち割り。浅い。

12.7　SK4325上層の土層図を作製し、写真撮影。JH25地区のSE4460をさらに掘り下げる。

12.9　SK4325を底まで掘り下げ、全景写真撮影。SE4335は縦板組みの井戸で、完形の土師器甕などが落ち込んでいる。

12.10　柱穴断ち割り。竪穴建物（SI4232）の写真撮影。実測終了。SE4335掘り下げ。

12.11　柱穴断ち割り。SE4335は底に小判形の大きな曲物を東西を長軸にして据え、その外側に幅約20㎝の板を組み立てた多角形の井戸と判明。JL34地区SE4461掘り下げ。竪穴建物（SI4233）は床面まで掘り始める。竈らしき焼土あり。

12.12　柱穴断ち割り。SI4233は南東隅に竈があり、南壁に接して貯蔵穴がある。一部砂入れ。

12.13　柱穴断ち割り。HL25地区のSE4474は、縦板組の中に上段に大型、下段には中型の曲物を据えている。完形の把付き短刀出土。

12.14　柱穴断ち割り。竪穴建物（SI4233）を床面まで精査。

12.16　柱穴断ち割り。SI4233全景撮影。

12.17　柱穴断ち割り。HJ17地区の石組井戸SE4469に着手。井戸内を掘り下げ、大型の曲物を埋め込んだ底に達する。JS30地区の重複する竪穴建物（SI4234・4235）の掘り下げ開始。竪穴建物（SI4233）は竈断ち割り。古い竈の焚口上に、高杯を芯にした新しい竈の支柱を造りつけていることが判明。

12.18　北壁土層分層。北端の大土坑（SK4327）を北壁際で断ち割り。SI4235は周囲に壁溝が巡る。南壁中央に竈らしき焼土あり。

12.19　柱穴断ち割り。北壁土層実測。重複する竪穴建物（SI4234・4235）は古いSI4234の床面が深い。銅釧片1点出土。西北部埋め戻し。

12.20　柱穴断ち割り。HK15地区井戸（SE4470）の東半を断ち割り。掘方は二段掘りで、曲物を七段以上積み上げる。HH21地区の石列で囲まれた

Fig. 17　標定点設定風景（第46次）

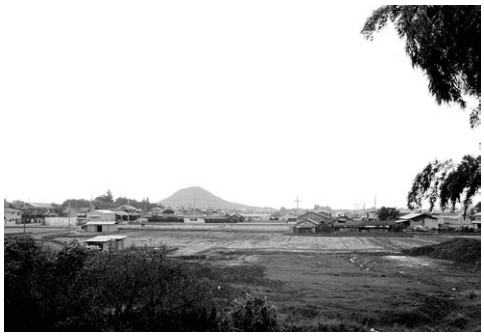

Fig. 18　空撮風景（第46次）

土坑（SX4500）精査。下層に南北塀（SA4286）の柱穴確認。

12.21　柱穴断ち割り。SE4470の曲物を取り上げる。SX4500は、石列の外側に柱穴を多数検出。SI4234・4235は床面までほぼ掘り下げる。全景写真撮影。

12.23　柱穴断ち割り。HH18地区の土坑は石組井戸（SE4468）となる。底面に曲物あり。HE32地区竪穴建物（SI4236）の東半を掘り始める。

12.24　柱穴断ち割り。

12.25　柱穴断ち割り。HG20地区の土坑は、曲物を三段以上積み重ねた井戸（SE4471）となる。SI4236は床面まで掘り下げ。貯蔵穴中から韓式系土器の蓋形土器出土。

12.26　柱穴断ち割り。SE4468の実測終了し、底の曲物を取り上げる。SE4471は実測しつつ曲物を取り上げる。SI4236写真撮影。貯蔵穴内の土器を取り上げる。

1.8　柱穴断ち割り。HG18地区の井戸（SE4467）に着手。方形縦板組井戸と判明。HH26地区の井戸（SE4473）は、円形の石組井戸と判明。

1.9　柱穴断ち割り。SE4467掘り下げ、全景写真撮影。SE4473の平面および断面図実測。竪穴建物（SI4236）の貯蔵穴と床面精査。四隅に柱穴を検出。

1.10　柱穴断ち割り。SE4467上半部を実測し、終了後東半を掘り下げる。横桟組で四隅に柱あり。SE4473は井戸内を掘り下げ、底の曲物を取り上げる。鉄鎌片出土。

1.11　坊間路西の南北塀（SA4283）の重複する柱穴断ち割り。平面検出とは逆で、南側が新しく、北側が古く浅い。SE4473立面図実測終了。

1.13　SE4467の井戸枠周辺および枠内を底まで掘り下げる。井戸枠の取り上げ開始。SE4473の北に重複する土坑を掘り下げたところ、曲物を数段重ねた井戸（SE4472）となる。

1.14　柱穴断ち割り。SE4467の井戸枠と底の曲物を取り上げる。井戸枠は建築部材を転用したもの。柄付の鉄鎌が出土。下半まで埋め戻す。HG18地区の井戸（SE4466）は埋土上部を少し掘り下げる。SE4473は最下段の曲物を実測し、取り上げた後に埋め戻す。

1.16　柱穴断ち割り。SE4466の掘方を底まで掘り下げる。JS36地区の井戸（SE4463）は井戸枠を全て抜き取っており、底の曲物のみ残る。JR40地区の井戸（SE4464）に着手し、南半全体を少し掘り下げる。JK38地区井戸（SE4462）掘り下げ。方形縦板組の井戸枠がわずかに残る。

1.17　柱穴断ち割り。SE4463を底まで掘り下げ、写真撮影。SE4464は南半を掘り下げる。円形の石組井戸で、底に大型の曲物を二段以上埋め込んでいることが判明。全景写真撮影。SE4462の全景写真撮影。実測。

1.18　柱穴断ち割り。SE4463掘方断ち割り。写真撮影、実測。SE4462縦板材を実測。

1.20　柱穴断ち割り。SE4464実測終了。曲物を取り上げる。SE4462写真撮影、実測終了後、縦板材を取り上げる。JN21地区土坑（SK4266）北半を断ち割り。古墳時代と飛鳥Ⅲの土師器出土。

1.21　東壁、西壁、北壁の一部土層図作製。南拡張区平面実測。

1.22　HD42地区西壁にかかる井戸（SE4465）を掘るため、西に拡張。抜取穴西半を掘り下げる。曲物井戸か。

1.23　SE4462は板材を取り上げて終了。SE4465の清掃、写真撮影、実測。HI14地区東壁にかかる須恵器甕周辺（SJ4260）を精査するため、一部拡張。上半を欠失する須恵器甕を伏せ、周りに小石を並べている。甕内には小石が約7～8個あり、その下に7世紀代の完形品の土師器杯あり。西壁土層図作製。重機で本格的に埋め戻しを始める。

1.24　SE4465全景写真撮影。曲物を取り上げ、掘方断ち割り。写真撮影、実測終了。埋め戻す。JS14地区の竪穴建物（SI4231）の埋土を掘り下げる。須恵器甕（SJ4260）精査。

1.25　南壁土層図作製。SI4231掘り下げ。

1.27　南壁土層図終了。南拡張区清掃、SB4291の全景写真撮影後、柱穴断ち割り。SI4231精査、全景写真撮影。

1.28　SI4231実測、竈断ち割り、写真撮影。

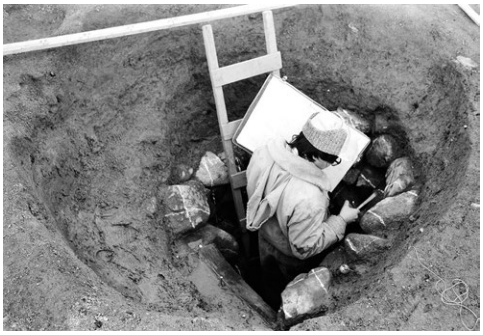

Fig. 19　SE4468調査風景

Fig. 20　SE4469調査風景

C　第47次調査　6AJC-N区、6AJD-H区
1985年11月28日～1986年6月20日

11.28　調査区を設定。東西50m、南北60mの3,000㎡。

12.9　西端より重機掘削開始。

12.10～19　重機掘削。

12.20　西側に地区杭打ち。西、北側に排水溝を掘る。

12.21　調査区西から包含層（灰褐土）を掘り下げ。西北端で地山を検出。

12.23　灰褐土掘り下げ。

12.25・26　重機掘削のみ。

12.27　ベルコンを並べ、機材整備。

1.7　ベルコンを始動。灰褐土掘り下げ。

1.8　西端の灰褐土を掘り下げ。斜行する南北溝（SD4755）を検出。

1.9　灰褐土掘り下げ。北端で土坑や柱穴などを多数検出。

1.10～14　灰褐土掘り下げ。

1.16　灰褐土掘り下げ。重機掘削終了。

1.17・18　灰褐土掘り下げ。

1.20　北東隅で遺構検出。

1.21　東南部に残っていた灰褐土を取り終え、西に折り返し遺構検出。

1.22　調査区北端、NMライン以北に山土混褐色土が広がる。整地土の可能性を考えて、この上面で遺構検出。径約15cmの柱穴が北端に集中する。

1.23　NG～Ｉライン間で東西大溝SD4130の肩を一部確認。

1.24　灰褐土掘り下げ。大土坑（SK4327）検出。

1.25　灰褐土掘り下げ。

1.27　NCライン南に幅1.25mの東西溝（SD4139）あり。埋土に瓦を包含。

1.28　SD4139検出。計算値では条間路は第46次調査で検出したHRライン南の東西溝を北側溝に比定すべきであるが、当溝は北に偏し過ぎているきらいがある。

1.29　灰褐土掘り下げ。

1.30　22ライン東で南北に並ぶ柱穴列（SA4730）を検出。第46次調査で検出したSA4286の北延長上にあたる。

1.31　灰褐土掘り下げ。

2.1　NJ23地区に円形掘方の井戸（SE4782）あり。14世紀前半。

2.3　条間路南北両側溝と推定される二条の東西溝（SD4311・4139）検出。

2.4　NK・L24地区で方形の柱穴（SB4786）検出。

2.5　SB4786は遺物包含層を掘りこんで柱穴を穿っている。遺物包含層が竪穴建物などの遺構になるものか否かは、現段階では不明。

2.6　灰褐土掘り下げ。NL26地区周辺で円形や方形の柱穴を多数検出。

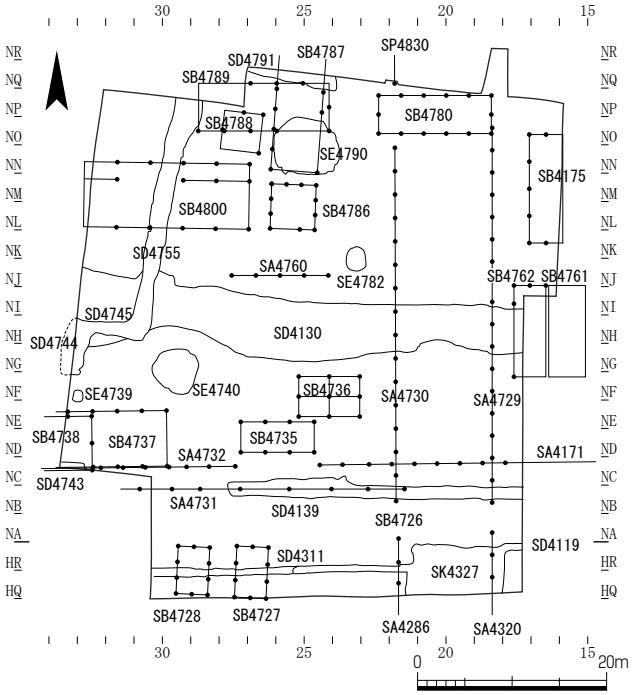

Fig. 21　第47次調査区　1:800

2.7　27ラインで一辺1.25mの柱穴2基（SB4800）を検出。
2.8　ND27地区で柱穴2基（SB4735）を検出。
2.10　NN24地区周辺精査。井戸（SE4790）検出。
2.12　北半に南廂付東西棟建物（SB4800の北廂部）あり。南方約5.1mの位置に、柱筋を揃えて一辺約1mの柱穴が並ぶ。
2.13　西南隅で南北棟建物（SB4728）、西北隅で中世の南北大溝（SD4755）を検出。埋土は肩部に焼土が集中し、瓦器が入る。
2.15　SD4755の最上層を掘り下げる。NI30地区で西に折れ（SD4745）、調査区西端で南北溝（SD4744）に接続する。塼仏や、鎌倉～室町時代の菊水双雀鏡出土。
2.17　SD4755は、NH・Ⅰ地区の東岸に瓦が集中している。
2.19　南廂付東西棟建物（SB4800）は、桁行が4間以上となる。
2.20　写真撮影に備えて清掃。
2.21　地上写真撮影。終了後、西端より折り返して遺構の再検出作業開始。
2.22　南廂付東西棟建物（SB4800）は、調査区内に北側柱なし。西南隅のNC～Fライン間で2棟の東西棟建物（SB4737・4738）検出。重複関係は不明。
2.24　SD4755と東西大溝（SD4130）掘り下げ。
2.25　SD4130の南、NF29・30地区で土坑状の落ち込み（SE4740）を検出。井戸と思われる。SD4755の東肩でSD4130確認。埋土から藤原宮期か奈良時代初頭の土師器杯B出土。
2.26　SD4745・4755などの中世大溝写真撮影。条間路南側溝（SD4311）を掘り始める。SD4311と南北棟建物（SB4728）は、建物が新しい。
2.27　南西端で3間×2間の南北棟建物（SB4728）検出。
2.28　26～29ラインにかけてSD4130の最上層を掘り下げる。10世紀代の黒色土器など出土。
3.1　SB4737の東妻柱は不明。側柱の東延長上に同規模の柱穴は見つからない。SD4130から出土する瓦は、藤原宮期以前に限られている。
3.3　SD4130掘り下げ。SB4728の東にあり、同形同大の南北棟建物（SB4727）を検出。条間路南側溝（SD4311）より新しい。
3.4　25ラインまで遺構検出。
3.5　ND・Eラインに沿って、柱筋を揃えて東西に延びる2条の柱穴列（SB4735）検出。
3.6　SD4130掘り下げ。
3.7　条間路北側溝（SD4139）の出土土器は、飛鳥ⅣかⅤ。瓦が多い。埋土を掘り上げると東西柱穴列（SA4731）検出。
3.8　NN24地区の大土坑（SE4790）を、南北に畦を残して掘り下げ。下層に暗灰粘土が深く堆積し、井戸の様相がさらに深まる。昨日検出した東西塀（SA4731）は、SD4139より古いと確認。
3.10　19ラインまで遺構検出。
3.12　SD4130以北を精査。SA4730の北への続き検出。
3.13　北で整地土（山土混褐土）を掘り下げて初めて柱穴を検出（SA4730・SB4780）。SD4311は東の第45次調査区で検出したSD4119に接続する公算が大。
3.15　SD4130北で遺構検出。
3.17　SD4130以南は東壁に達し、折り返す。
3.18　SD4130の北で、整地土を5㎝掘り下げて遺構検出。大型柱穴は山土混褐土、灰色粘質土上面では検出できない。18ライン南北塀（SA4729）がSD4130を越えるか否かは不明。
3.19　SA4729がほぼ北端に達していることが判明。北2つの柱穴埋土には山土が交じっており、他の柱穴と異なる。山土混褐土の上面で検出はできなかったが、埋土を重視すれば山土混褐土は柱穴より古いと考えられる。
3.20　北東端の掘立柱建物（SB4780）は、東西3間まで確認。調査区外北に延びる。NDライン南の掘立柱列は、北、南に筋を揃えた柱穴列がないので、東西塀（SA4171）と考えられる。

Fig. 22　写真撮影風景（第47次）

Fig. 23　調査風景（第47次）

3.22　24ラインまで遺構検出。
3.24　25ラインまで遺構検出。
3.25　東西塀（SA4171）は3間×1間の東西棟建物（SB4735）の前で途切れる。22ライン南北塀（SA4730）については、ND～Gラインの間で少なくとも3回の重複関係がある。SD4130以北では大土坑（SE4790）の南に3間×3間の建物（SB4786）が建つ。
3.26　SD4130以北で遺構検出。南北棟建物（SB4787）検出。南廂付東西棟建物とみていたものは、北廂付建物（SB4800）となるようだが、妻柱がない。
3.27　SD4130掘り下げ。東西棟建物（SB4737）と東西塀（SA4732）の重複関係を精査。SB4737が新しい。
3.29　23ライン以東のSD4130で青灰細砂層（中層）を掘り下げ。灰粗砂層（下層）上面を検出。
3.31　SD4130の23ライン以東で灰粗砂層を掘り下げ。土器は飛鳥Ⅴを主体とし、溝の開削はそれ以前か。NG30地区土坑（SE4740）の茶褐土層はSD4130の茶褐土層（上層）と同質のものであり、埋没時期が近いと思われる。
4.1　SD4130の青灰粘土層、青灰細砂層（中層）を掘り下げ。「香山」と記した墨書土器出土。
4.2　写真撮影および実測。SE4740東西畦南面の土層図作製。
4.3　写真撮影。
4.5　SD4130の灰粗砂層等を掘り下げる。青灰粘土（中層）から、底部に「馬」とヘラ書きした須恵器出土。
4.7　SD4130の23～28ライン間を完掘。SA4729および周辺の柱穴を精査。東西塀（SA4171）のNC17地区の柱穴が、2基重複しているものであることが判明。
4.8　清掃。空撮用標定点設定。
4.9　清掃。測量。
4.12　排水作業。
4.14　空撮。地上写真撮影。
4.16　清掃。
4.17　地上写真撮影。
4.18　記者発表。
4.19　現地見学会。約90名来訪。
4.21　貫板打ち。
4.22・23　遣方設定。
4.24　平面実測。
4.25　平面実測。標高記入。
4.26　標高記入。
4.30　北辺の27ライン以東で南北4m幅、東辺のJIライン以北で東西3.5m幅の拡張区を設定。重機掘削開始。
5.1　南西部で柱穴断ち割り。北拡張区：遺構検出開始。
5.2　拡張区：重機掘削終了。
5.7　北拡張区：西半より遺構検出。北端に中世集落の区画溝とみられる東西溝SD4791検出。
5.8　北拡張区：西半部整地土上面（山土混褐土）で遺構検出。
5.9　北拡張区：整地土上面での遺構検出終了。写真撮影。東半は整地土下に柱穴がかなり隠れていると思われる。東拡張区：整地土上面で遺構検出開始。
5.10　東拡張区：整地土上面での遺構検出。
5.12　東拡張区：整地土上面での遺構検出終了。第45次調査区へ続く建物（SB4761・4762）は、5間×4間の可能性が高い。北拡張区：整地土掘り下げ開始。南北塀（SA4729）の北延長部を確認。
5.13　東拡張区、全景写真撮影。北拡張区：整地土掘り下げ。2条の南北塀（SA4729・4730）の間に東西棟建物（SB4780）検出。
5.15　北東部の断ち割り調査開始。東拡張区：整地土掘り下げ。
5.16　SB4780は5間×2間と判明。SB4780内で

Fig. 24　標定点設定風景（第47次）

Fig. 25　現地見学会（第47次）

SA4730の延長部を掘り下げて精査するが、SA4730の柱穴はなし。拡張区：遺方設定。

5.17　北東部の断ち割り。拡張区：平面実測。

5.19　北東部の断ち割り終了。拡張区の平面実測も終了。

5.21　柱穴断ち割り。NN24・25地区の大土坑（SE4790）掘り下げ。石組井戸と判明。

5.22　柱穴断ち割り。SE4790掘り下げ。

5.23　柱穴断ち割り。SE4790掘り下げ。石組下に曲物を検出。

5.24　柱穴断ち割り。SE4790平面・立面実測。

5.26　柱穴断ち割り。SE4790底の曲物を取り上げ。SE4740横板組井戸枠内の掘り下げ開始。

5.27　南東部柱穴断ち割り。拡張区：清掃。

5.28　午前中写真撮影。SE4790周囲の大土坑の性格を明らかにするため十字形にトレンチを入れ、井戸の抜取穴と掘方を確認。

5.29　南北塀（SA4729）北延長部に長さ５ｍの拡張区を設定し、灰褐土を掘り下げる。SE4740は横板組の四隅に角杭を打つ。出土遺物は９世紀。

5.30　SA4729北の拡張区：包含層掘り下げ。SE4740の掘方および井戸枠内掘り下げ。

5.31　SE4740井戸枠内掘り下げ。地表下約２ｍで砂混褐色粘質土（中層）となり、多量の土器を包含している。奈良時代末。「宅」墨書土器出土。北拡張区にSA4729の北延長部はなし。

6.2　SE4740横桟の上で和同開珎出土。奈良時代後半の土師器、須恵器と「香山」墨書土器出土。SE4790東側掘り下げ。北拡張区：写真撮影。

6.3　SE4740東西畦南面の土層図作製。南北塀（SA4730）および門（SB4726）の柱穴断ち割り。北拡張区：平面実測。

6.4　柱穴断ち割り。写真撮影。

6.5　柱穴断ち割り。SD4130の30ライン以東を掘り下げ。SA4732がSB4737より古いことを再確認。

6.6　SD4130掘り下げ。木簡の削屑１点出土。

6.7　清掃。

6.9　SD4130掘り下げ。SE4740周囲の土坑を四分の一掘り下げた結果、井戸掘方であることが判明。井戸周囲の小さい土坑は、抜取穴とすべきであろう。

6.10・11　SE4740掘方の掘り下げ。

6.12　SE4740写真撮影。井戸枠は柱などを荒削きした材を横に並べただけで、特別な木組は行っていないことが判明。このために、裏込めはかなり丁寧になされている。

6.13　SE4740井戸枠取り上げ。井戸最下層から無文銀銭、棒状金銅製品、呪符木簡など多数出土。

6.14　SE4740井戸枠内底の地山に到達。北拡張区：柱穴断ち割り。

6.16　SE4740掘方を掘り下げる。北拡張区：柱穴断ち割り。

6.17　SE4740の井戸枠を全て取り上げた後、掘方の写真を撮影し、埋め戻し。柱穴断ち割り終了。

6.18　南壁、北壁面土層図作製終了。

6.19　西壁面土層図作製終了。清掃。

6.20　重機による埋め戻し開始。

Fig. 26　断割図作製風景（第47次）

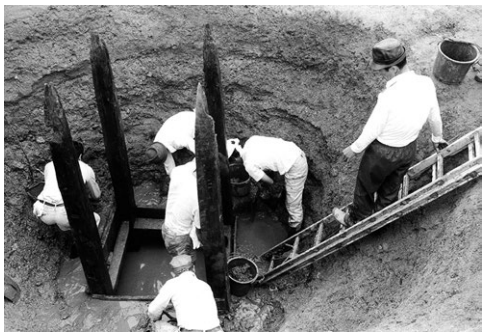

Fig. 27　SE4740調査風景

D　第50次調査　6AJC-N区、6AJD-A・H区
1986年7月28日～12月19日

7.28　第47次調査区の西に調査区（西区）を設定し、調査準備着手。重機によりコンクリート舗装などを除去。

7.29　コンクリート舗装除去。

7.30　重機にて北から表土掘削。床土の下は中世の土器を包含する灰褐色土層。

7.31　重機掘削。ベルコンを設置して灰褐土掘り下げ開始。

8.1　重機掘削。灰褐土掘り下げ。基準点設定し、地区杭打ち。NP36地区で土坑（SE5055）検出。NP32地区から塼仏出土。

8.2　重機掘削。灰褐土上半掘り下げ。

8.4～8　重機掘削と並行して灰褐土上半掘り下げ。地区杭打ち。

8.9　HO～Qライン間の遺構検出。HPライン上で東西棟建物（SB5000）の北側柱列検出。第46次調査で検出したSB4333と柱筋を揃える。東三坊坊間路東側溝（SD4301）より新しい。東側溝は北で東折し六条条間路南側溝（SD4311）となる。

8.11　HPライン上の柱穴に組み合う柱穴を、HMライン、35・42ラインで検出。7間×3間の建物（SB5000）と考えられる。重機掘削終了。

8.12　HM40地区でSB5000の柱穴検出。柱穴と坊間路西側溝SD4302の関係は、溝より柱穴が新しいことを確認。

8.18　南から北進して遺構検出。坊間路の東西両側溝（SD4301・4302）を検出。SA4283に続くと思われる柱穴を3基検出。HLラインに沿って、目隠塀かと考えられる柱穴を8基検出。柱穴と側溝の関係は、柱穴が側溝より新しい。

8.19　HM～Pライン間の精査で、SB5000の身舎の規模が桁行7間、梁行3間と確定。昨日検出したHLラインの柱穴列は、SB5000の南廂と考えられる。柱穴とSD4301の関係を写真撮影。

8.20　西側溝（SD4302）はHRライン付近で再び途切れた。SB5000の東側、北側を精査するが、廂は検出できない。

8.21　NAラインから北へ遺構検出。

8.22　東西大溝（SD4743）の掘り下げ。NCラインに沿って柱穴4基検出。第47次調査で検出した東西塀SA4731の続きとなると考えられる。

8.23　NFラインで、第47次調査検出の中世大溝の続きと考えられる溝（SK5004）の南肩を検出。

8.25　SK5004検出。13世紀末～14世紀の瓦器、土師器、瓦を含む。

8.26　SK5004完掘。大土坑（SK5015）が重複していることが判明。SK5004の方が古い。

8.27　SK5015とNG33地区の土坑（SD4744）は、SD4744が新しく、第47次調査で確認した中世大溝が南折しているものらしい。上層より鬼瓦を含む多量の瓦が出土。SK5004東端には一辺約2mの土坑（SE5010）が重複。SK5004より古い。NF35地区の中世土師器小皿埋納坑（SJ5007）実測、土器取り上げ。

8.28　SD4744を掘り下げる。

8.29　NGラインの北1.7mから始まった淡褐土の厚い堆積はNJラインの北1mで終わり、それ以北は褐色土となる。この間が東西大溝（SD4130）か。

8.30　褐色土は東西大溝SD4130北岸の土層で、NKライン付近でなくなり、以北は黄灰褐土の地山となる模様。

9.1　中世の土坑3基と柱間6尺の柱穴群を検出。総柱建物（SB5020）か。NK33地区の耕作溝から、緑釉獣脚硯片出土。

9.2　昨日検出した柱穴は、3間×2間の南北棟総柱建物（SB5020）としてまとまる。

9.3　NNラインの北で大型の柱穴2基を検出。第

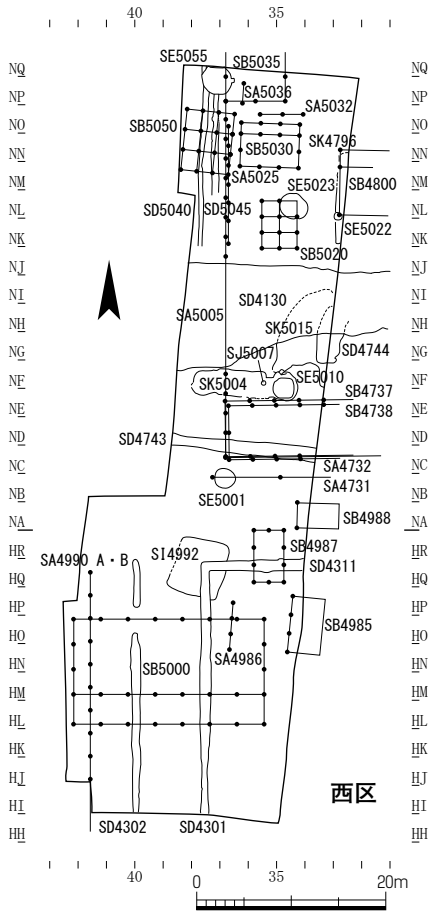

Fig. 28　第50次調査 西区　1:800

47次調査で検出した東西棟建物（SB4800）の西妻の柱穴。NNラインの北で東西３間分の柱穴（SB5030）を検出。

9.4　東西棟建物SB5030は北に廂が付く。柱穴から瓦器出土。西北部では大型の柱穴が出始める。

9.5　西北部で建物２棟（SB5035・5050）を検出。SB5035は南北棟と推定され、南妻柱列と側柱１間分を検出。SB5050は南北３間×東西１間以上。西北隅のNP・Q37地区では、直径約３ｍの土坑（SE5055）を検出。

9.6　SB5050の柱穴を一部掘り下げ。抜取穴から平安時代の土器出土。

9.8　SB5050は南北３間、東西２間以上の総柱建物となる。

9.9　SB5050周辺の遺構検出。第45次調査中央区の南東に、東区設定準備。

9.10　SB5050に重複して、それより古い２条の小柱穴列（SA5005・5025）を検出。

9.11　東西大溝SD4130南のNFライン上には、重複する柱穴列がある模様。

9.12　NG34地区周辺の大土坑（SK5015）南半部を完掘。NFライン上に東西３間分の柱穴を検出。47次調査で検出した東西棟（SB4737・4738）の西延長部にあたる。37ライン沿いに塀と考えられる柱穴３基（SA5005）を検出。

9.13　NG33地区SD4744、NG34地区のSK5015とNK・L32地区のSK4796掘り下げ。

9.18　SD4130南肩からNBライン間の遺構検出。

9.19　39ライン以西HQ～NB間の遺構検出。坊間路東側溝（SD4301）と条間路南側溝（SD4311）の交点周辺に、方形の暗褐砂土が分布する。竪穴建物（SI4992）と思われる。

9.20　SD4311より新しい小柱穴２基を検出。３間×２間の南北棟建物（SB4987）の側柱。

9.22　NAライン以北の清掃。土坑、溝、小溝の写真撮影。NC～Kライン間に遣方設定。

9.24　NC～Kライン間の平面実測。NKライン以北清掃。柱穴と土坑を掘り下げる。

9.25　標高記入。NKライン以北の写真撮影。SK5015の下層を掘り下げる。

9.26　SK5015を完掘。写真撮影。

9.27　NDライン東西大溝（SD4743）の南肩から、北に向かって遺構検出。４カ所に重複した柱穴を検出。東西棟建物（SB4737・4738）の南側柱と、東西塀（SA4732）の柱穴となる。

9.29　NFライン南で重複した柱穴を検出。最大で４基重複し、最も新しいものは５間×２間の東西棟建物（SB4738）にまとまる。建物の西妻柱筋と重複して南北塀（SA5005）あり。

9.30　ND・Ｆライン南の柱穴を検出。SD4130南肩の検出を開始。

10.1　SD4130北肩の検出のため、NI～Ｋライン間の精査。

10.2　SD4130の北肩を検出。

10.3　SD4130最上層の淡褐粘質土を掘り下げる。SA5005より約60㎝東で南北塀（SA5025）の柱穴４基を検出。

10.4　SD4130掘り下げ。暗青灰粘土（上層）から「香□」と記した墨書土器出土。

10.6　SD4130暗青灰粘土掘り下げ。遺物は少なく、新しいものは９世紀代のもの。暗青灰粘土の下は暗茶褐有機土（上層）となる。この層も東へ続かず、溝が南へ広がる部分にのみ堆積する。

10.7　SD4130青灰粘土（中層）掘り下げ。土器は奈良時代後半のものが中心。東区を設定。

10.8　SD4130青灰粘土下半及び暗灰砂土（中層）の掘り下げ。暗灰砂土から木簡２点出土。「収稲霊亀二年」。東区：重機掘削。

10.9　第47次調査区を含めて、SD4130灰褐砂（中層）を掘り始める。31ライン東で断ち割ったところ、灰褐砂の下に杭を打った小さな井堰状の施設がある。

10.11　SD4130灰褐砂掘り下げ。

10.13　SD4130北肩の褐色粘土（中層）を掘り下げ、さらにその下の青灰砂（中層）を掘り下げる。青灰砂の下は暗灰褐砂礫（中層）となり、木質を多く含む。緑釉獣脚硯、木簡、斎串など出土。

10.14　SD4130の33ライン以西で暗灰褐砂礫掘り下げ。第47次調査で未掘の29・30地区では、淡灰粗砂（中層）を掘り下げる。井堰とみていた杭群

Fig. 29　調査風景（第50次）

Fig. 30　調査風景（第50次）

は、東西方向にも杭列が延び、L字状になる。暗褐粘土層（中層）中に木屑層確認。杭群の東側のみに存在する。

10.15　SD4130灰色細砂（中層）掘り下げ。奈良時代の土器出土。北半で残していた暗灰褐砂礫（中層）を掘り下げ。

10.16　SD4130掘り下げ。青灰微砂（中層）の南には青灰細砂（中層）が薄く堆積。その下は灰色砂礫（下層）、その下が茶褐砂礫の地山となる。井戸（SE4740）周囲の大土坑は、石敷きを残していた部分も含めて完掘。

10.17　SD4130北肩を検出。溝底近くは青灰粘土が堆積。NI37地区を中心に、青灰粘土や微砂を含む暗灰褐砂礫が地山直上にある。NH32地区暗灰砂土から「菜採司」木簡出土。

10.18　SD4130灰色細砂（中層）掘り下げ。第47次調査での青灰細砂に相当する。出土土器は、奈良時代前半のものを中心とする。NI31地区で「左京職」木簡出土。

10.20　SD4130暗灰粘土（中層）掘り下げ。杭列写真撮影。最下層を茶灰砂礫とする。東区：重機掘削が終了し、測量と地区杭打ち。

10.21　SD4130奈良時代流路写真撮影。茶灰砂礫（下層）掘り下げ。土器は藤原宮期以前に限られ、奈良時代の遺物は認められない。

10.22　SD4130茶灰砂礫の掘り下げ。

10.23　SD4130茶灰砂礫完掘。SD4130の調査はほぼ終了。

10.24　西区：南から清掃。東区：西から東へ向けて遺構検出。文化庁長官来訪。

10.25　西区：SB5000西妻柱列の柱穴全体を出すために、西へ約1m拡張。東区：遺構検出。

10.27　本日より西区中断、東区の調査に集中。東へ向けて遺構検出し、柱穴、溝等を検出。

10.28　91ラインまで遺構検出。柱穴はいずれも塀となる。塀は第45次調査で検出した区画塀SA4110の延長部と、その外郭の塀と考えられる。

10.29　AL90地区周辺で、2間×2間の建物（SB5070）を検出。南北塀（SA5080）の西に南北溝（SD4135）があり、南で東へ折れる様だ。

10.30　西から遺構再検出。98ライン西にある南北溝（SD4135）は塀と同様に南で東折（SD5084）し、塀と一連のものであることが判明。

10.31　西から清掃。SB5070の柱穴掘方から中世の小皿出土。

11.1　91ライン以西の清掃。写真撮影。

11.4　87～89ライン間の遺構検出。87ライン西には東に向けた落ち込み（SD4143）がある。最下層は7世紀代の遺物のみで、堀河の西肩か。

Fig. 31　文化庁長官来訪（第50次）

11.5　87ライン以東の遺構検出。小柱穴が散在する。SD4143の肩は、南で西に広がる。AL87地区の土坑は円形を呈し井戸（SE5065）になる模様。完形の瓦器椀出土。

11.6　SD4143の西肩を出す。AKライン北に試掘トレンチを設け、掘り下げる。

11.7　西半部の清掃と写真撮影。SD4143の最上層掘り下げ。中世の遺物を含む。

11.8　清掃後、写真撮影。

11.10　西区を再開し、南から清掃。東区：空撮用標定点設置。

11.11　西区：南からSD4130南肩まで清掃。

11.12　西区：SD4130南肩から北に向けて清掃。空撮用標定点設置。

11.13　空撮。東区：遣方設定。

11.14　東区：水糸配り。西区：遣方設定。

11.15　東区：平面実測。西区：水糸配り。

11.17　東区：平面実測。SD4143青灰微砂の掘り下げを開始。西区：水糸配り

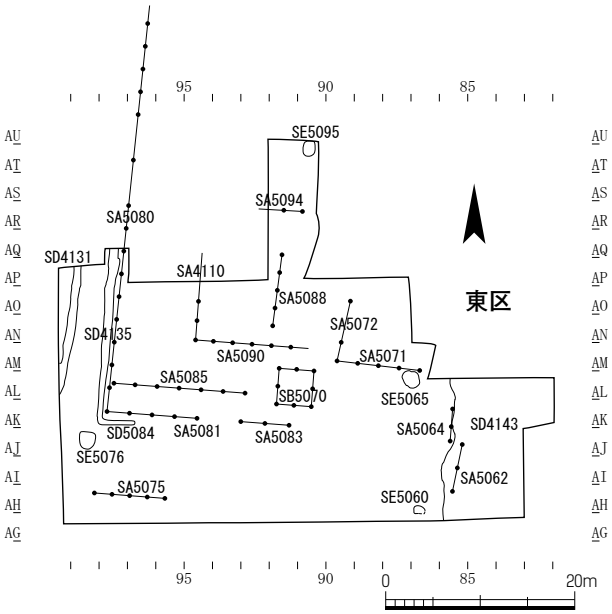

Fig. 32　第50次調査 東区　1:800

11.18　東区：SD4143の青灰粘土、青灰砂礫の掘り下げ。標高記入。西区：平面実測。

11.19　東区：SD4143の青灰砂礫掘り下げ。土器は飛鳥Ⅳ・Ⅴが目立つ。西区：平面実測。

11.20　東区：SD4143を掘り上げ、写真撮影。西区：平面実測。

11.21　東区：SD4143の実測終了。西区：平面実測終了。午後記者発表。「香山正倉」に注目集まり、反響大。

11.22　現地説明会。伊豆三原山大噴火のため、奈良新聞以外は記事を掲載せず。聴衆約80名。

11.25　SD4143を測距器実測。東区：SA4110などによる区画内部の様子を探るため、AP～AU間で92ラインより東に8ｍ幅で拡張し、重機で上土掘削。西区：標高記入。

11.26　東区：拡張区の重機掘削終了。耕作溝掘り下げ。北西隅のSD4131・4135、SA5080がかかる部分を、第45次調査区まで北へ拡張。西区：SD4130実測終了。

11.27　東区：両拡張区の遺構検出。北東拡張区の東北隅に楕円形の土坑（SE5095）あり。炭、フイゴ羽口、鉄滓を含む。

11.28　東区：北東拡張区の精査。塀による区画内に、中心的な建物はない。北西拡張区：遺構検出。

11.29　東区：SD4131の清掃。柱穴の写真撮影及び実測。

12.1　東区：拡張区の実測。AH86地区の土坑は中世以降の井戸SE5060で、曲物を井戸枠とする。西区：NB37地区の井戸（SE5001）掘り下げ。円形の石組枠内に曲物あり。

12.2　東区：SE5060の調査。曲物四段が残る。西区：SE5001石組みの写真撮影。時期は中世大溝とほぼ一致する。

12.3　東区：SE5060実測。西区：SE5001井戸枠の曲物取り上げ、埋め戻し。

12.4　東区：SD4143の東肩を探るため、南北幅5ｍで東へ3ｍ拡張するが、検出できず。一部埋め戻し開始。

12.5　東区：SD4143を掘り下げるが、湧水が著しく断念。西区：NL32地区井戸（SE5022）と、NL34地区井戸（SE5023）の掘り下げ。ともに曲物を井戸枠とする。西壁南半土層図作製。

12.6　西区：西壁北半の土層図作製。東区：埋め戻し。

12.8　西区：SE5023の井戸枠取り上げ。SE5022は井戸枠三段目の写真を撮影後、実測。SB5000の柱穴断ち割りを北側柱列から開始。東区：埋め戻し。

12.9　西区：西北隅の井戸（SE5055）の掘り下げ。SB5000柱穴断ち割り。東区：埋め戻し。

12.10　西区：SE5055の掘り下げ。石組みが現れる。奈良時代の総柱建物（SB5050）の全体を知るために、西北隅を東西2.5ｍ、南北13ｍで西に拡張。東区：埋め戻し終了。

12.11　西区：SB5000柱穴の断ち割りと実測。東区の塀（SA5080）は第45次調査区では未検出のため、その部分を東西4～5ｍ、南北22ｍの範囲で再調査。南半の約10ｍで柱穴を検出。

12.12　西区：柱穴断ち割り、実測。北壁土層図作製。SE5055は写真撮影後、曲物を取り上げて埋め戻す。拡張区でSB5050の柱穴を検出。東区：再調査区でSA5080の柱穴8基検出。写真撮影後実測。

12.13　西区：拡張区ではSB5050を東西3間まで確認。東区：再調査区柱穴の断ち割り、実測。砂を入れ一部埋め戻し。

12.15　西区：坊間路西側の塀（SA4990）はHNライン以北は未検出のため、北側の整地土を部分的に掘り下げて柱穴検出。

12.16　西区：L字に交わる側溝（SD4301・4311）を掘り下げる。SA4990は条間路に入った場所で途切れるのを確認し、実測。

12.17　西区：SD4301・4311完掘、写真撮影。SB5050の柱穴断ち割り。

12.18　西区：SB5050柱穴断ち割り。南辺から砂をまき、重機で埋め戻し開始。

12.19　器材を撤収し、砂をまき、埋め戻し。

Fig. 33　現地説明会（第50次）

Fig. 34　現地説明会（第50次）

E　第53次調査　6AJC-F区、6AJD-A・B・H・J区
1987年2月13日～5月12日

2.12　北区と中区の2箇所の調査区設定。第45・50次調査区と一部重複。北区から開始。

2.13～20　重機による表土掘削。

2.21　ベルコンを設置し、遺構検出開始。

2.23　南から清掃。地区杭を打つ。

2.24　南から遺構検出。重機掘削終了。

2.25　包含層（茶褐砂質土）を掘り下げ、南北大溝（SD4143）を探す。

2.26　北区：SD4143の西肩検出。中区：重機による表土掘削開始。

2.27　AR～FFラインで遺構面まで掘り下げ。

3.2　第45次調査区埋め戻し土除去後、北側の床土と灰褐土を掘り下げ。暗褐粘質土上面まで掘り下げる。

3.3　SD4143の上面、及び暗褐粘土まで掘り下げる。

3.4　暗褐粘土及び黄色粘土の層で耕作溝検出。

3.5　北端に達し、南へ折り返し遺構検出。

3.6　西半部には灰褐砂質土があり、掘り下げる。SD4143は、ほぼ南北に直線的に通る。

3.7　灰褐砂質土掘り下げ。

3.10　FJ～Hライン間の調査。FI91地区に円形の土坑（SE5920）があり、井戸と思われる。

3.11　FG～Cライン間の精査。

3.12　北区：FC～ARライン間の精査。小型の柱穴による2間×2間の南北棟建物（SB5925）検出。中区：重機掘削終了。

3.14　北区：AR～Qライン間の精査。86ライン西でSD4143の西肩検出。

3.16　北区：SD4143西肩は、AR～AOラインにかけて約3m西側へ広がる。南からSD4143の掘り下げ開始。中区：地区杭打ち。

3.17～19　北区：SD4143掘り下げ。

3.20　北区：SD4143掘り下げ。北まで行きつく。

3.23　北区：北端部の斜行する溝状遺構（SD5921）掘り下げ。

Fig. 35　SD4143調査風景

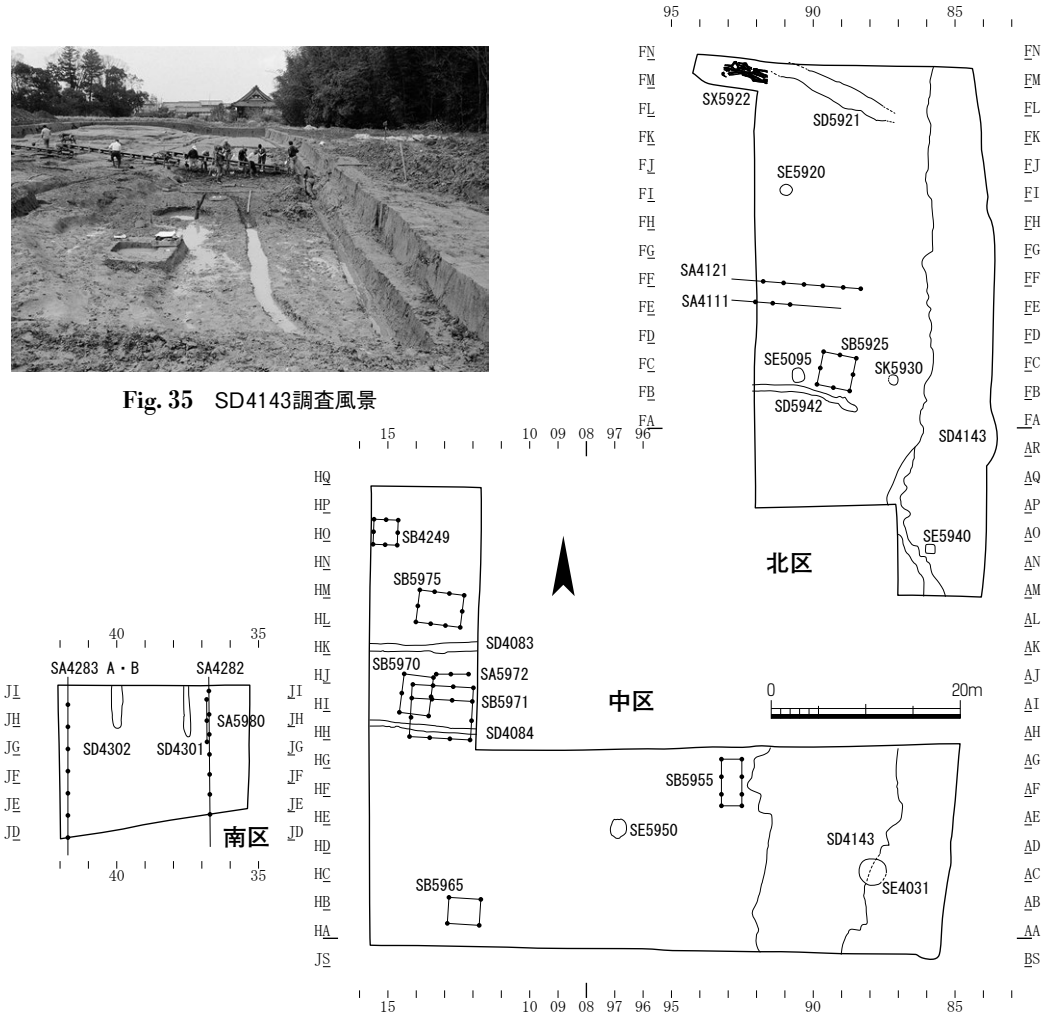

Fig. 36　第53次調査区　1:800

3.25　北区：北から清掃。
3.26　北区：清掃。写真撮影。
3.27　北区：遣方設定。中区：ベルコンを設置。
3.28　北区：遣方設定。中区：南辺部の排土。
3.30　北区：遣方設定。水糸配り。中区：88～91ライン間の灰褐土掘り下げ。
3.31　北区：平面実測。中区：東から進んでいたが、現場班交代に向けて西北端にベルコンを移動。
4.1　北区：実測。中区：本日より新現場班に引き継ぎ。HP～Ｊラインまで遺構検出。
4.2　中区：HJ～Ｂラインまで遺構検出。
4.3　北区：SD4143北端部を幅３ｍで掘り下げ。暗青灰微砂となり、底と判断する。北壁土層図作製。中区：HBラインから南端まで到達し、東へ向け08ラインまで遺構検出。
4.4　北区：SD4143をFJラインまで掘り下げ。中区：08～95ラインまで遺構検出。
4.6　北区：SD4143の掘り下げ。調査区北端部分で、青灰粘質土中から自然木が東西に数本まとまって出土（SX5922）。柱穴断ち割り開始。中区：90～95ラインまでの遺構検出。3間×1間の建物（SB5955）検出。
4.8　北区：FB87地区の土坑（SK5930）は浅い。AN85地区土坑（SE5940）は縦板組井戸と判明し、北半を断ち割り。FI91地区土坑（SE5920）は中央部の暗灰土を掘り下げる。中区：90～89ラインまでの遺構検出。
4.9　北区：SE5940北半断ち割り。土層図作製後、井戸枠取り上げ。中区：89～87ラインまでの遺構検出。
4.10　北区：SD4143の縦断面となる東壁土層図作製。FI91地区土坑（SE5920）南半を断ち割り。素掘りの井戸と思われる。中区：87ライン～東端までの遺構検出。
4.13　北区：西北隅の拡張。SX5922の木は自然木であるが、2～3本は上下を人工的に切った痕跡が認められる。中区：SD4143の西肩を検出。
4.14　北区：拡張区のSX5922を清掃、写真撮影、実測。中区：SD4143の掘り下げ。敷地西南隅部の東三坊坊間路がかかる位置に調査区を設定し、南区とする。表土掘削。
4.15　北区：SX5922の実測後、木を取り上げ。中区：HP～Ｈライン間を清掃しながら遺構検出。南区：表土掘削終了後、測量。基準点設定。
4.16　北区：SX5922の木材取り上げ。埋め戻し。中区：清掃、写真撮影。
4.17　中区：清掃、写真撮影。
4.18　中区：写真撮影。
4.20・21　中区：遣方設定。南区：遺構検出。
4.22　中区：平面実測。南区：遺構検出。
4.23　中区：平面実測。標高記入。南区：遺構検出。
4.24　中区：空撮用標定点設置。南区：坊間路東の塀（SA4282）の続きの柱穴を検出。これらの柱穴に接して、一回り小さい柱穴（SA5980）を検出。
4.25　北区：空撮用に清掃。中区：空撮標定点の設置。
4.27　南区：西から東へ遺構検出。坊間路西の塀（SA4283）の延長を検出。2回以上の建て替えがあった模様。坊間路両側溝（SD4301・SD4302）の延長を検出。非常に浅く、JHラインで途切れる。
4.28　南区：清掃後、写真撮影。
4.30　北・中・南区空撮。中区：井戸（SE5950）を半截。南区：遣方設定。
5.2　中区：半截した遺構の写真、土層図作製。南区：平面実測。
5.6　中区：北半の柱穴断ち割り。SE5950掘り下げ。南区：平面実測。標高記入。
5.7　中区：SB5970・5971の柱穴断ち割り。南北大溝（SD4143）の断ち割り開始。SE5950は地表下50cmで土師器甕が転倒した状態で出土し、その一層下から「□記」の墨書がある土師器出土。
5.8　中区：SD4143を、南北2箇所で断ち割り後実測。西壁土層図作製。
5.11　中区：埋め戻し。南区：SA4282・4283柱穴断ち割り。
5.12　中区：埋め戻し終了。南区：SA4282柱穴断ち割り。浅いが、掘方が二段になるものを確認。土層図作製後、埋め戻し。調査終了。

Fig. 37　SE5940調査風景

Fig. 38　調査風景（第53次）

F　第133-7次調査　5AJC-M・N区
2004年9月4日～10月25日

9.4・7　調査区内の木の伐採作業。
9.8　調査区設定。重機による表土掘削開始。
9.9～14　重機掘削。
9.15　13～15ライン間の包含層掘り下げ。北へ向かって地形が傾斜している。
9.16　西端に行き着き、折り返して遺構検出。
9.17　16ラインで柱穴2基検出。南北塀（SA4170）の続きか。北の柱穴には柱根あり。
9.21　15ラインから、第45次調査区西端に設けた畦まで遺構検出。
9.22　SA4170の柱穴と、13～16ライン間の斜行溝（SD9952）掘り下げ。NP14地区に落ち込みがあり、遺物は古墳時代の土師器のみ出土。
9.24　16～17ライン間の遺構掘り下げ。
9.27　南西隅の灰褐砂質土の掘り下げ。写真撮影に向けて、第45次調査区清掃。
9.28　清掃。写真撮影。
9.30　排水作業。水糸配り。平面実測。
10.1　標高記入。SA4170柱穴断ち割りと西壁土層図作製。
10.4　斜行溝（SD9952）に土師器壺の底部を据えた遺構（SJ9953）を検出するが、SD9952とは無関係と判断する。13ライン西の畦の土層図作製。調査終了し、砂まき。埋め戻しまで一時中断。
10.18　埋め戻し開始。
10.25　埋め戻し終了。

G　第133-13次調査　5AJC－F・N区
2005年3月7日～4月18日

3.7　調査区設定。南北7m、東西40mの範囲のアスファルト除去。
3.8　重機掘削。改良地盤が固いために、掘削に手間取る。
3.9　重機掘削。
3.10　重機掘削。調査区東南隅で花崗岩を検出し、礎石であることが判明。根石もあるが、性格は不明。第47次調査区で旧流路を確認し、掘り下げ。
3.11　重機掘削。
3.14　重機掘削。南壁際で石組井戸（SE4177）検出。地区杭を打ち、東から遺構検出開始。調査区西端付近は攪乱が著しく、浅い遺構は残存しない。
3.15　重機掘削終了。東部にベルコンを設置し、遺構掘り下げ。遺構面は整地土とその上を流れた旧流路上面。遺構はいずれも中近世のもの。
3.16　東半の遺構検出、掘り下げ完了。東南隅の礎石に対応する遺構は、本調査区内にはない。石組井戸（SE4177）の埋土を約30cm掘り下げ。石組上面を清掃して石の輪郭を露出。
3.18　16ラインで南から延びるSA4170の柱穴列を検出したが、残存状況は良くない。FO17地区でSB4175の東北隅の柱を検出。その南方の柱穴は攪乱で失われている。SE4177は埋土を約60cm掘り下げたが、危険なため底部まで約1mを残して掘り下げを断念。曲物、瓦器等出土。
3.24　清掃。写真撮影。
3.25　水糸配り。平面実測。
3.28　標高記入。
3.29　標高記入。土層図作製。
3.30　NN15地区の大土坑は、埋土中に藤原宮期かそれ以前の土器を多量に含む。
3.31　NN15地区の大土坑は井戸（SE10175）と判明。埋土は大きく3層に区分されるが、大部分が井戸枠抜取穴の埋土で、掘方埋土はわずかに残るのみ。
4.1　SE10175の東壁に残されていた掘方埋土の掘り下げ。SA4170とSB4175の柱穴断ち割り。
4.4　北壁、東壁の土層図作製。砂まき。
4.5　土層図の注記。
4.6　南壁土層図作製。調査終了。
4.14　埋め戻し開始。
4.18　埋め戻し終了。

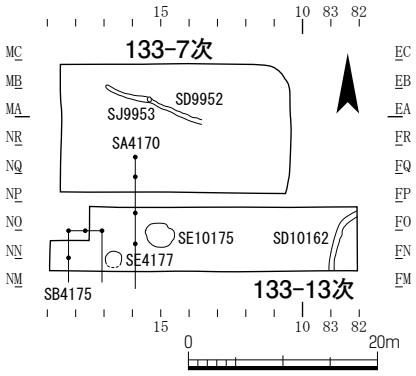

Fig. 39　第133-7・13次調査区　1:800